

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第104集

寄^{より}元^{もと}古墳群
上^{うえ}ノ^の段^{だん}遺跡

2002

財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター



寄元 3 号墳石室内遺物出土状況（北東から）



寄元 4 号墳石室全景（南から）



寄元古墳群出土の須恵器瓶類と勾玉・耳環



上ノ段遺跡と猿投山を南からのぞむ

序

豊田市北部にある猿投山は、高さこそは控えめながらその雄大な姿は地域の人々にとってシンボリックな存在であります。それは今も昔も変わらぬ風景だったことでしょう。古墳時代の人々も日々猿投山を眺め、何かと意識すべき対象だったことと思われます。

本書は、その猿投山の山麓につくられた古墳時代後期の寄元古墳群と上ノ段遺跡の発掘調査報告書であります。寄元古墳群では、横穴式石室を有する2基の古墳を調査し、墳丘や石室構造を解明しました。石室からは耳環や直刀、鉄鏃、須恵器などの遺物が出土しました。また、上ノ段遺跡では小規模な調査ながら、掘立柱建物跡を確認し、土坑からは奈良時代の須恵器が出土しました。

発掘調査から報告書刊行に至る間には地域の皆様をはじめ、関係機関の皆様には多大な御協力をいただいております。厚くお礼申し上げますとともに、本書が地域史研究の一助になることを期待したいと思います。

平成14年8月

(財)愛知県教育サービスセンター
理事長 井上 銀治

例 言

1. 本書は、愛知県豊田市加納町字寄元に所在する寄元古墳群のうち寄元3号墳（遺跡番号63-484）および寄元4号墳（遺跡番号63-485）と加納町字上ノ段に所在する上ノ段遺跡（遺跡番号63-057）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、猿投グリーンロード拡幅工事に先立つもので、愛知県道路公社から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 調査期間は平成11年6月（上ノ段遺跡）、平成11年4～6月（寄元4号墳）、平成12年4月～6月（寄元3号墳）である。
4. 上ノ段遺跡および寄元4号墳の発掘調査は、佐藤公保（主査・現愛知県立惟信高等学校）、花井伸（調査研究員・現三好町立三好中学校）、鈴木正貴（調査研究員）が担当し、寄元3号墳の発掘調査は、花井伸（主査・同上）、武井繁樹（調査研究員・現知立市立知立南小学校）、小嶋廣也、成瀬友弘、永井邦仁（調査研究員）が担当し、渡辺周子、秋田道子（調査補助員）が補佐した。
5. 石室石材の鑑定は、堀木真美子（調査研究員）による。
6. 調査・報告書作成にあたっては次の各関係機関・個人から御協力・御教示を頂いた。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、
愛知県道路公社、豊田市教育委員会、加納町自治会、加藤安信、梅本博志、松井孝宗、森泰通、
天野博之、城ヶ谷和広、北村和宏、羽根田稔、羽根田和夫
7. 報告書作成に関わる整理作業は、鈴木正貴、永井邦仁（調査研究員）が担当し、遺構・遺物実測図のトレースを八木佳素美（調査研究補助員）が、遺物の接合・復元を牧ゆかり、斉藤佳美が補佐した。
8. 遺構写真の撮影は、鈴木正貴、永井邦仁が行い、遺物写真の撮影は永井宏幸、永井邦仁が行った。
9. 本書の執筆は、鈴木正貴と永井邦仁が分担し（目次に提示）、平尾良光氏、鈴木浩子氏（独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所）には第2章第4節を執筆して頂いた。なお、本書の編集は永井邦仁が行った。
10. 調査区の座標は、国土交通省告示の平面直角座標系に準拠した。ただし、本書は旧基準「日本測地系」で表記した。海拔標高はT.P.（東京湾平均海面標高）による。
11. 本書で使用する色調名は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』に依拠した。
12. 調査に関する実測図・写真などの資料は全て本センターが保管している。
13. 調査で出土した遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。

目 次

第1部 寄元古墳群

第1章 序説

第1節 調査に至る経緯と調査の概要	(鈴木正貴)	1
第2節 遺跡の環境	(永井邦仁)	4
(1) 遺跡周辺の地形・地質		4
(2) 遺跡周辺の歴史的環境		6

第2章 寄元3号墳の調査

第1節 古墳の遺構	(永井)	9
(1) 発掘調査前の状況と測量調査の成果		9
(2) 墳丘		10
(3) 横穴式石室		14
第2節 古墳の遺物	(永井)	20
(1) 須恵器		20
(2) 金属・玉類		22
(3) 石製品		22
(4) 骨片		22
第3節 古墳時代以外の遺構・遺物	(永井)	24
(1) 縄文時代		24
(2) 中世		24
第4節 耳環の自然科学的研究	(平尾良光・鈴木浩子)	26

第3章 寄元4号墳の調査

第1節 調査の経過	(鈴木)	33
第2節 遺構	(鈴木)	35
(1) 立地		35
(2) 墳丘		36
(3) 石室		36
第3節 遺物	(鈴木)	41

第4章 まとめと付論

第1節 寄元3号墳について	(永井)	42
第2節 寄元古墳群について	(永井)	43

第2部 上ノ段遺跡

第1章 序説

第1節 調査の概要と遺跡の環境	(鈴木)	48
-----------------	------	----

第2章 調査の成果

第1節 遺構	(鈴木)	49
(1) 基本層序		49
(2) 遺構		52
第2節 遺物	(鈴木)	55
第3節 まとめ	(鈴木)	56

引用・参考文献一覧		57
-----------	--	----

写真図版

挿図目次

第 1 部 寄元古墳群

- 図 1 遺跡の位置
- 図 2 寄元古墳群古墳全体図
- 図 3 箆川流域の地形区分図
- 図 4 箆川流域の地質区分図
- 図 5 周辺の遺跡分布図
- 図 6 地形測量図
- 図 7 土層断面ライン設定位置図
- 図 8 墳丘土層断面図
- 図 9 全石材・遺構全体図
- 図10 原位置石材平面図
- 図11 石室基底石平面・側壁・奥壁立面図
- 図12 石室礫床面遺物出土状況図
- 図13 須恵器実測図
- 図14 勾玉実測図
- 図15 金属製品実測図
- 図16 SK01土層断面図
- 図17 古墳時代以外の土器・陶器実測図
- 図18 耳環
- 図19 耳環 1 のスペクトル像
- 図20 耳環 2 のスペクトル像
- 図21 鉛同位体比図
- 図22 地形測量図
- 図23 調査区全体図
- 図24 検出石材平面図
- 図25 墳丘・石室内土層断面図
- 図26 石室平面・立面図
- 図27 使用石材の区分とその重量
- 図28 須恵器実測図
- 図29 寄元 3 号墳墳丘復元案
- 図30 寄元 3 号墳・（仮称）5 号墳地形測量図
- 図31 （仮称）5 号墳北方セクション土層図
- 図32 箆川流域の横穴式石室との比較

第 2 部 上ノ段遺跡

- 図 1 上ノ段遺跡位置図
- 図 2 調査区壁面土層図
- 図 3 調査区壁面土層図
- 図 4 遺構全体図
- 図 5 遺物出土分布図
- 図 6 遺構土層断面図
- 図 7 出土遺物実測図

表目次

- 表 1 周辺の遺跡一覧
- 表 2 須恵器計測値一覧
- 表 3 鉄鏃計測値一覧
- 表 4 耳環計測値一覧
- 表 5 中世土器・陶器計測値一覧
- 表 6 耳環の化学組成
- 表 7 鉛の同位体比

写真図版目次

- 写真図版 1 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版 2 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版 3 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版 4 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版 5 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版 6 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版 7 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版 8 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版 9 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版10 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版11 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版12 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版13 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版14 寄元 3 号墳／遺構
- 写真図版15 寄元 3 号墳・（仮称）5 号墳／遺構
- 写真図版16 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版17 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版18 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版19 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版20 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版21 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版22 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版23 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版24 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版25 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版26 寄元 4 号墳／遺構
- 写真図版27 寄元 2 号墳
- 写真図版28 上ノ段遺跡／遺構
- 写真図版29 上ノ段遺跡／遺構
- 写真図版30 上ノ段遺跡／遺構
- 写真図版31 寄元 3 号墳／遺物
- 写真図版32 寄元 3 号墳／遺物
- 写真図版33 寄元 3 号墳／遺物
- 写真図版34 寄元 3 号墳・4 号墳・上ノ段遺跡／遺物

第 1 部

寄元古墳群

Yorimoto Tumuli

第1章 序説

第1節 調査に至る経緯と調査の概要

愛知県豊田市北部の八草一力石間の約13kmを結ぶ猿投グリーンロードでは、交通量の増大に伴い拡幅工事が行われることとなった。その猿投グリーンロード内では、既に滅失したとされる寄元古墳（愛知県遺跡番号63048）が存在していたが、この他の豊田市加納町字寄元地内における遺跡の存在については、平成7年作成の遺跡分布図（愛知県教育委員会1995）では特に記載されていなかった。しかしながら、地元では拡幅工事予定地内に未登録の古墳の存在が指摘されていたこと、および滅失した寄元古墳の一部または関連する遺構や遺物が発見される可能性が残されていたことなどから、道路建設予定地内における確認調査を行う必要が生じた。



図1 遺跡の位置

このため、平成11年度に愛知県道路公社から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが寄元古墳群の確認調査を実施することとなった。調査は平成11年4月から平成11年6月までの期間に150m²を行った。具体的には、道路建設予定地内に分布する古墳の存在を確認するため、2地区で地形測量調査と試

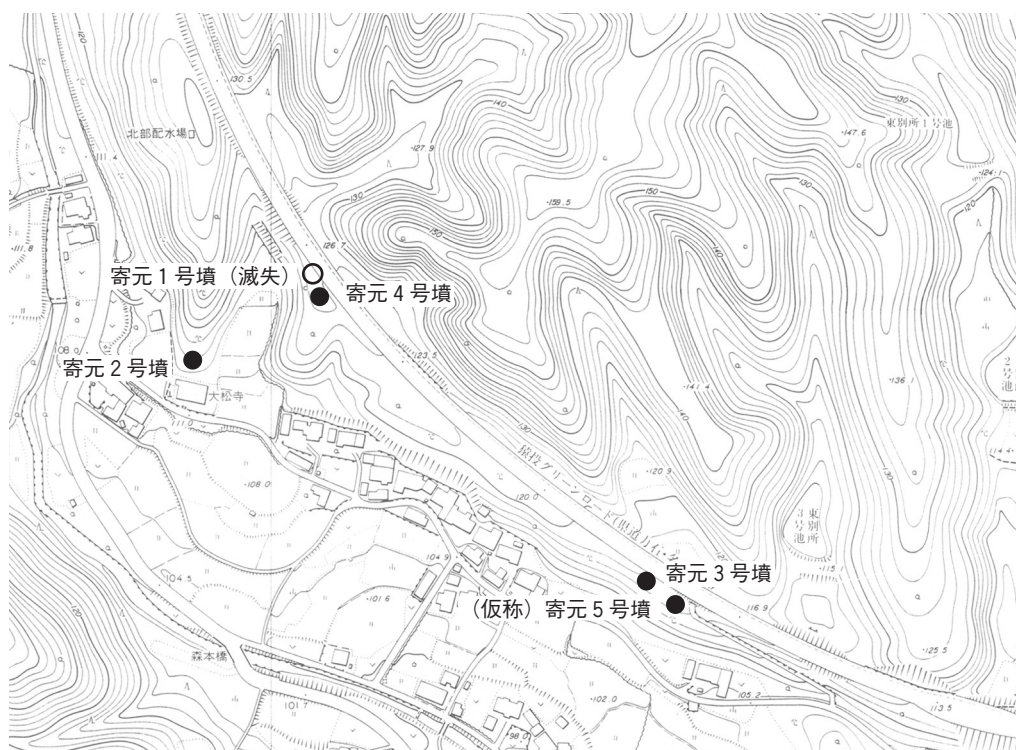


図2 寄元古墳群全体図（1/5000 平成3年度版豊田市基本図を改変）

掘調査を実施した。その結果、東部のA地区では横穴式石室を持つ古墳1基（寄元3号墳）が、西部のB地区では小規模な横穴式石室古墳S Z 01（寄元4号墳）がそれぞれ確認された。そして、B地区のS Z 01に関しては、愛知県埋蔵文化財調査センターと協議の結果、そのまま引き続いて本調査も実施することとなった。なお、用いた遺跡名の略号



寄元古墳群遠景（右手の丘陵地 南東から）

はⅡPYM、調査区は99区である。調査担当者は佐藤公保、花井伸、鈴木正貴であった。

B地区の調査の結果、寄元4号墳は8世紀初頭の直径約4.5mの円墳で、残存長が約2.4m、最大幅約1.0m、高さ約1.0mを測る横穴式石室を持つことが判明した。石室内から須恵器平瓶が1点出土した。なお、当初に発見が予想された寄元古墳（寄元1号墳）に関連する遺構、遺物については、全く確認することができなかった。

なお、この確認調査に関する発掘届の遺跡名は、地元で存在が指摘されていた古墳の所在地が、加納町字上戸長と誤認されていたために、上戸長古墳という名称が用いられていた。しかし、実際には加納町字寄元に位置していたため、後に寄元古墳群という名称に変更した。また、寄元古墳群の各古墳の名称については、豊田市教育委員会と愛知県教育委員会との協議の結果、滅失した寄元古墳を寄元1号墳、大松寺の背後（北側）の崖上に所在する開口した石室を持つ古墳を寄元2号墳（第4章第2節を参照）、地元で存在が指摘されていたA地区の古墳を寄元3号墳、B地区で新たに確認されたS Z 01を寄元4号墳と称することとした。

この確認調査の結果に基づいて、翌平成12年度には愛知県道路公社から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが寄元3号墳の発掘調査を実施することとなった。調査は平成12年4月から平成12年6月までの期間に600㎡を行った。発掘調査の結果、寄元3号墳は6世紀後半代を中心とする直径約12mの円墳で、全長が約5.5m、最大幅約1.4m、推定高さ約1.2mを測る横穴式石室を持つことが判明した。石室内外から勾玉、銅製耳環、須恵器提瓶、杯蓋、杯身、鉄鏃、鉄刀の一部や人骨とみられる骨片が出土した。また、縄文時代晩期の条痕文土器片や中世の土師器皿、灰釉系陶器、伊勢型鍋といった他の時期の遺物も出土し、中世の土坑1基を確認したが、縄文時代晩期に該当する遺構は見い出すことができなかった。出土遺物量はP-27コンテナで2箱分であった。調査区は00区と称する。調査担当者は花井伸、武井繁樹、永井邦仁であった。

また、調査中に3号墳の東側にある林中の高まりを古墳と認め（仮称）5号墳としたが、グリーンロード拡幅外であるため調査対象とならず、実体は不明である。

寄元3号墳調査日誌抄（平成12年度）

- 4月11日（火） 発掘調査開始。一同合掌した後、作業着手。中央セクション設定。表面の黒色土の掘削開始。同時に横穴式石室開口部の竹根などの除去を開始する。
- 4月19日（水） 石室東側にて人頭大礫の集積を確認。表面観察では礫が組まれたように見受けられたため、第2主体部（石室）と仮定して調査を進める。
- 4月22日（木） 第2主体部（仮称）にトレンチを設定、掘形を確認し、人為的な遺構であることを確認した。また、横穴式石室は天井石のほとんどが失われていることが予想された。その周囲にトレンチを設定し、側壁の検出を開始する。同時に石室内の埋土も掘削開始。この時点で石室の規模は明かになっていない。また、墳丘南東側下方に土坑(SK01)を確認した。
- 4月28日（金） 黒色土を除去した段階で墳丘の航空測量を実施。
- 5月1日（月） 墳丘北側に中央ベルトと平行にトレンチを設定（北トレンチ）。
- 5月10日（水） 横穴式石室について、崩落・移動した礫については出土状況を図化した後除去していく。また、第2主体部（仮称）についても同様に解体を進めていった。
- 5月13日（土） 加納町民を対象とした地元説明会を実施。約30名の参加があった。
- 5月15日（月） 横穴式石室前庭部にトレンチを設定。掘削した土をフルイ（3mmメッシュ）にかけると、須恵器小片が出土した。
- 5月16日（火） 墳丘南西斜面の黄褐色土を掘削すると、外護列石状に礫が確認された。
- 5月18日（木） 墳丘北西隅にトレンチを設定。墳丘後背周溝を確認する。
- 5月22日（月） 墳丘中央セクションでの土層観察。墳丘築成過程の概要が明らかになる。調査進行が遅れているため愛知県道路公社に対し、6月6日までの調査期間延長許可について協議する。
- 5月25日（木） 横穴式石室左壁が盗掘によって大きく崩壊していることが判明。これまで第2主体部としていた礫の集中は、盗掘時に引き出された左壁の石材であることが判明。呼称を第2主体部から盗掘坑に変更し、盗掘坑の掘削を進める。
- 5月26日（金） 石室内の埋土を完掘。床は準大の円礫が敷き詰めてある。床面にて金属製品（直刀・鉄鏃ほか）、骨片、勾玉、左壁にもたれるようにして須恵器提瓶が出土した。埋土中からは耳環2点が出土したが、正確な出土位置は把握できなかった。遺物出土状態を図化し、写真撮影の後、全点を取り上げた。
- 5月29日（月） 石室内完掘。礫床を図化する。
- 5月30日（火） 石室左壁の立面図作成。
- 6月1日（木） 石室右壁の立面図作成。石室後背にも礫があることを確認した。3号墳南東隅から5号墳（仮称）に向けてトレンチを設定。堀木・鬼頭調査研究員による石材の鑑定を受ける。
- 6月2日（金） 横穴式石室の解体に着手。重量のあるものは滑車を用いて移動する。可能な範囲で石材重量を測定。
- 6月5日（月） 石室基底石を確認、図化。墓坑掘形を確認、図化。3号墳での発掘調査を終了する。
- 6月6日（火） 5号墳（仮称）の測量調査を実施する。



寄元3号墳の調査風景（左：全景 右：石室内落下石材の取り上げ）

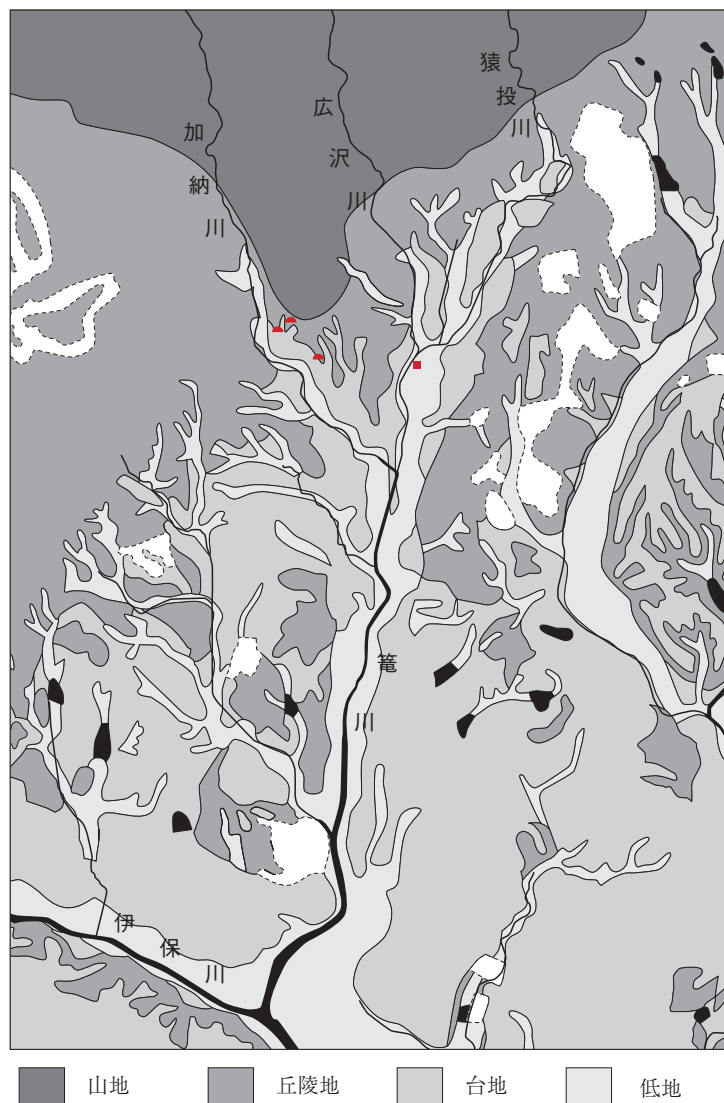
第2節 遺跡の環境

(1) 遺跡周辺の地形・地質

豊田市北部から瀬戸市南部にかけての地域は、主に山地および丘陵地と台地、そして河川両脇の低地から成り立っている。山地の最高地点は猿投山（標高629m）で、寄元古墳群はその南麓に位置する。猿投山からは南へ3つの河川が流下しており、東から猿投川・広沢川・加納川である。これらの河川はやがて猿投町・加納町内で合流して簗川となって南下する。本書ではこれら河川を簗川流域として把握する。簗川はさらに下って伊保川そして豊田市梅坪町にて矢作川に合流する。これら中小河川の両側にある低地は狭小であり、そこからすぐに台地そして丘陵地へと上がってしまう。丘陵地・台地では現在、桃などの果樹栽培が盛んであるが、灌漑整備の進展によって水田としても多く利用されている。

加納川下流域は、低地はほとんどないものの、3河川の中でも比較的広い台地面（標高95～110m）があり、加納川北側には加納町集落（人口約1000人）が広がっている。寄元古墳群はその加納町集落の後背である丘陵地末端に立地している。丘陵地末端は細かく入り込んでおり、今回確認された3基の古墳はそれぞれ異なる舌状に張り出した小尾根上に位置している。うち、2・3号墳は現集落に近接しているが、4号墳はやや奥まったところにある。なお、遺跡の位置は北緯約35度9分35秒、東経約137度9分40秒である。

3号墳は既に猿投グリーンロードで分断された北西から南東方向に延びる尾根筋のほぼ末端、標高120mに位置する。3号墳南下方を走る道路との比高差は約15mである。南東側にほと



※破線は人工改変地、黒抜きは河川及び池

図3 簗川流域の地形分類図 (1:50000 経済企画庁総合開発局国土調査課1972、愛知県企画部土地利用調整課1983をもとに作成)

んど遮蔽物がなく、豊田市街中心部まで見渡すことができる。

4号墳は3号墳のある尾根より2つ西の、北から南方向へ延びる尾根上、標高130mに位置する。尾根の末端は民家や畑があって旧状をどれだけ残しているか不明だが、少なくとも4号墳は尾根末端よりも若干奥まった高位置にある。

2号墳は4号墳の所在する尾根の西隣の尾根上、標高118mに位置する。2号墳の南側は削られて大松寺という寺堂が建っており、その比高差は4mである。

寄元古墳群の立地する丘陵地末端は、豊田市北部・瀬戸市南部一帯の山地・丘陵地ではごく一般的な地質である、風化花崗岩を地山とする。ただ4号墳では花崗岩の露岩が確認され、風化の度合いが場所によって異なっていることがわかる。3号墳付近ではさほどの労力なく平坦面および墓坑の掘削が可能であるが、一方で付近から石室に用いる石材の調達ができなかったと考えられる。ところが4号墳では、露岩の掘削にかなりの労力が必要となるが、その地点で石室用石材が入手できるメリットがあったと考えられる。



簗川から寄元古墳群方向をみる



■ 中生代 ■ 新第三紀 ■ 洪積世 ■ 沖積世

図4 簗川流域の地質分類図(1:50000 経済企画庁総合開発局国土調査課1972、愛知県企画部土地利用調整課1983をもとに作成)

(2) 遺跡周辺の歴史的環境

箆川流域の低地とその周辺の台地・丘陵地に立地する遺跡について概観する。

縄文時代 猿投・広沢川沿いに広沢遺跡（3）、神郷下遺跡（14）がある。神郷下遺跡は昭和46年の発掘調査で晩期の土器が出土している（豊田市史編さん専門委員会1976）。

弥生時代 箆川下流の低地にある亀首遺跡（50）が後期の遺跡とされる。一方流域西側の丘陵地には、大角豆洞遺跡（19：中期）、塚越遺跡（39：後期）があり、塚越遺跡では土器の集中廃棄遺構が確認された（豊田郷土史研究会1976）。

古墳時代 古墳時代の集落遺跡は、伊保川流域では古墳時代前期の叩き甕が出土した伊保遺跡（70：猿投町誌編集委員会1968）や古墳時代後期の土製竈が多く出土した江古山遺跡（54：森1997）などの注目すべき調査事例があるのに対し、本流域での知見は少ない。亀首遺跡（50）、舞木遺跡（42）、子持勾玉が採集され（森1990）、今回発掘調査が実施された上ノ段遺跡（20：第2部参照）などの、川に面した低地や台地に立地する集落が想定される。しかし、その範囲や存続時期、周囲に存在する古墳群との対応関係など、今後の調査研究を待つ他ないのが現状である。なお、この時期の生産遺跡として、箆川西岸の丘陵地にて、須恵器窯である上向イ田3・4号窯（46～47）が発掘調査されている。4号窯からは5世紀末～6世紀初頭の須恵器や朝顔形円筒埴輪などが出土している（猿投町誌編集委員会1968）。

一方で古墳、特に後期古墳の石室および出土遺物についてはよく知られている。寄元古墳群の近隣では、加納川を挟んで南の丘陵地に藤山古墳群（25～28）、その東方、箆川東岸丘陵には池田古墳群（22～24）と、格段に規模の大きな石室墳を含む古墳群が立地する。また、上ノ段遺跡に近接して上ノ段古墳（21）がある。さらに上流域にまで範囲を広げると、広沢

表1 箆川流域の遺跡一覧

番号	行政区	遺跡名	時代	番号	行政区	遺跡名	時代	番号	行政区	遺跡名	時代
1	豊田市	広沢城跡	室町	27	豊田市	藤山3号墳	古墳後期	53	豊田市	矢遠古墳	古墳
2	豊田市	大悲殿経塚	江戸	28	豊田市	藤山4号墳	古墳後期	54	豊田市	江古山遺跡	弥生～奈良
3	豊田市	広沢遺跡	縄文	29	豊田市	南荒子経塚	江戸	55	豊田市	根川1号墳	古墳後期
4	豊田市	中条氏古墓	室町	30	豊田市	大沢遺跡	古墳	56	豊田市	根川2号墳	古墳
5	豊田市	後田古墓	室町	31	豊田市	山洞1号墳	古墳後期	57	豊田市	根川3号墳	古墳後期
6	豊田市	地家1号墳	古墳後期	32	豊田市	山洞2号墳	古墳後期	58	豊田市	徳合院古墓	鎌倉
7	豊田市	地家2号墳	古墳後期	33	豊田市	山洞3号墳	古墳後期	59	豊田市	伊保古城跡	室町
8	豊田市	地家3号墳	古墳後期	34	豊田市	山洞4号墳	古墳後期	60	豊田市	隠狭間1号墳	古墳
9	豊田市	神郷1号墳	古墳後期	35	豊田市	南沢1号墳	古墳後期	61	豊田市	隠狭間2号墳	古墳
10	豊田市	神郷2号墳	古墳後期	36	豊田市	南沢2号墳	古墳	62	豊田市	下西山塚状遺構	不詳
11	豊田市	神郷3号墳	古墳後期	37	豊田市	山洞古窯	平安	63	豊田市	金山古窯	平安
12	豊田市	広沢1号墳	古墳後期	38	豊田市	向山古窯	鎌倉	64	豊田市	北野古墳	古墳
13	豊田市	広沢2号墳	古墳後期	39	豊田市	塚越遺跡	弥生後期	65	豊田市	百々ヶ沢館跡	中世
14	豊田市	神郷下遺跡	縄文晩期	40	豊田市	塚越古墳	古墳	66	豊田市	東山古墳	古墳後期
15	豊田市	寄元古墳（1号墳）	古墳後期	41	豊田市	向山古墓	鎌倉	67	豊田市	御船遺跡	先土器
16	豊田市	寄元2号墳	古墳後期	42	豊田市	舞木遺跡	古墳前期	68	豊田市	將軍塚古墳	古墳
17	豊田市	寄元3号墳	古墳後期	43	豊田市	舞木廃寺	飛鳥	69	豊田市	波岩1号墳	古墳後期
18	豊田市	寄元4号墳	古墳後期	44	豊田市	上向イ田1号窯	鎌倉	70	豊田市	伊保遺跡	弥生・古墳
19	豊田市	大角豆洞遺跡	弥生中期・古墳	45	豊田市	上向イ田2号窯	鎌倉	71	豊田市	少年院前塚古墳	古墳後期
20	豊田市	上ノ段遺跡	古墳	46	豊田市	上向イ田3号窯	古墳後期	72	豊田市	伊保原経塚	室町
21	豊田市	上ノ段古墳	古墳後期	47	豊田市	上向イ田4号窯	古墳後期	73	豊田市	四郷西山遺跡	弥生後期
22	豊田市	池田1号墳	古墳後期	48	豊田市	上向イ田5号窯	古墳	74	藤岡町	神子塚窯	中世
23	豊田市	池田2号墳	古墳後期	49	豊田市	上向イ田6号窯	平安	75	藤岡町	蔵屋敷窯	中世
24	豊田市	池田3号墳	古墳後期	50	豊田市	亀首遺跡	弥生後期・古墳	76	藤岡町	辻貝戸窯	19世紀
25	豊田市	藤山1号墳	古墳後期	51	豊田市	ハツコ洞1号塚状遺構	不明	77	藤岡町	向イ原遺跡	縄文前期
26	豊田市	藤山2号墳	古墳後期	52	豊田市	ハツコ洞2号塚状遺構	不明				

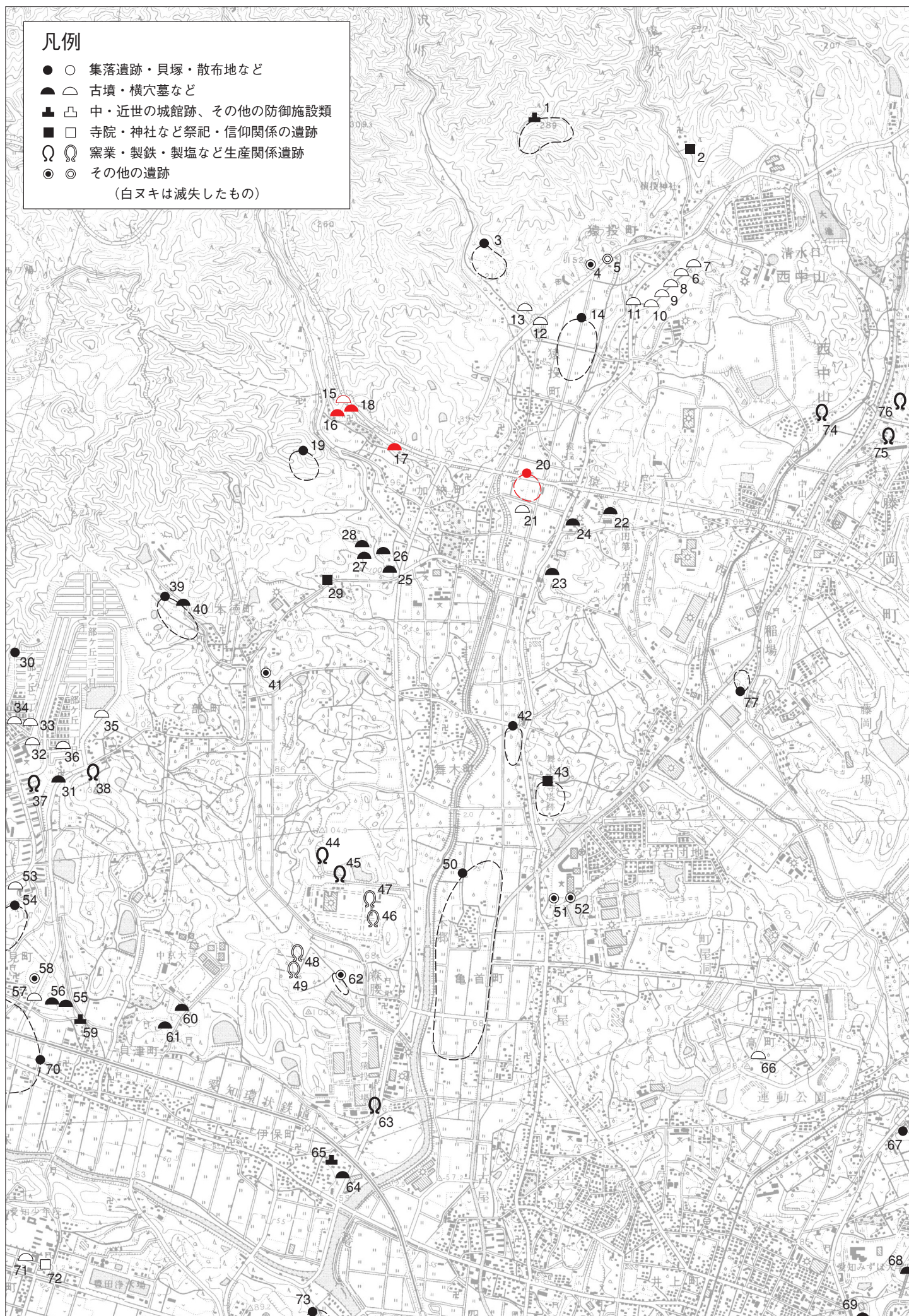


図5 周辺の遺跡分布図 (1/25000)

古墳群（12・13）、地家古墳群（6～8）、神郷古墳群（9～11）がある。その一方で下流域では前期～中期古墳の可能性のある北野古墳（64）が知られるのみで、亀首遺跡や舞木廃寺といった古墳～奈良時代にかけての生活域・宗教拠点の近隣には古墳時代を通じて古墳は認められず、古墳（群）の空白地帯となっている。

藤山古墳群のうち、藤山1号墳（25）は残存長13.6mの横穴式石室を有する6世紀中葉の古墳である。石室は擬似両袖式複室構造で、残存長13.6mは矢作川流域で最大長である（図34）。石室内からは勾玉6点管玉11点などをはじめとする副葬品が出土している（豊田市郷土資料館1974）。

池田1号墳（22）は直径19mの円墳で、擬似両袖式複室構造の横穴式石室（全長11.7m）を有する（図34）。形状は藤山1号墳と類似するが、より多くの巨石を使用している点異なる。出土遺物についての情報がないが6世紀末から7世紀前半の築造で、後に舞木廃寺創建に関わった氏族の墓と考えられている（愛知県教育委員会1977）。

上ノ段古墳（21）は簗川流域で唯一低地に築造された横穴式石室である。ほ場整備に先立って昭和46年に発掘調査が行われ、平面形が羽子板形を呈する無袖式の石室（残存長5.6m）であることが判明した。なお、石室は猿投中学校に移築されている。出土遺物は少ないが7世紀前半の須恵器が出土している。須恵器は追葬時のもので、築造そのものはそれより遡ると考えられている（豊田市郷土資料館1974）。単独墳であった可能性が高く、立地や石室構造の面で前2者と比較すると異質な古墳である。

広沢1号墳（12）は石室については不明であるが、提瓶などの須恵器および鉄鏃が出土した。須恵器から6世紀後半の築造と考えられる（豊田市郷土資料館1978）。また、地家古墳群および神郷古墳群は現在全て滅失しているが、地家1号墳からは金環・須恵器平瓶・提瓶などの遺物が出土している（愛知県教育委員会1995）。

奈良時代 簗川流域は加茂郡として律令制度に組み込まれた。亀首遺跡の後背丘陵地に立地する舞木廃寺（43）は、7世紀後半～8世紀前半に創建された古代寺院である。塔心礎がある以外、伽藍については不明であるが、岡崎市北野廃寺と同系統の素弁六弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、この時代も矢作川の中・下流域との交流が盛んだったことが知られる（梶山1993）。また猿投川の西岸には猿投神社がある。『延喜式』神名帳に列せられた西三河の代表的な神社である。現在猿投山には猿投神社の奥宮があり、猿投山を聖域として発展してきた神社であることを物語っている。

中世 中世、加納町一帯は三河国加茂郡高橋荘の一部の加納郷に属し、その一部は猿投神社に何度か寄進されていたことが記録に残されている（豊田市史編さん専門委員会1976）。周辺の遺跡では、簗川下流域の上向イ田1・2・6号窯（44・45・49）で灰釉系陶器が生産される。上流域では中条氏古墓（4）、後田古墓（5）といった中世墓が確認され、その後背山地には戦国時代の山城である広沢城跡（1）がある。また、加納町内の弘誓院薬師堂には室町時代末期の宝篋印塔がある（猿投町誌編集委員会1968）。

第2章 寄元3号墳の調査

第1節 古墳の遺構

(1) 発掘調査前の状況と測量調査の成果

寄元3号墳は、猿投グリーンロード本線南脇に位置しており、発掘調査着手以前は周辺も含め竹林になっていた。旧地権者によると、3号墳近辺の竹林は大正年間に旧挙母町（現・豊田市挙母町）内より移植した竹が繁殖したもので、それ以前は雑木林だったという。グリーンロードに面した箇所はかなり以前に削られて崖面になっており、防火水槽が設置されていた。

3号墳のある尾根の南方下には道路に面して地藏堂があり、そこから上ってくる小道が石室開口部前に至る。開口部前には石製灯籠と石製小祠が置かれていた。石製灯籠には「寛政

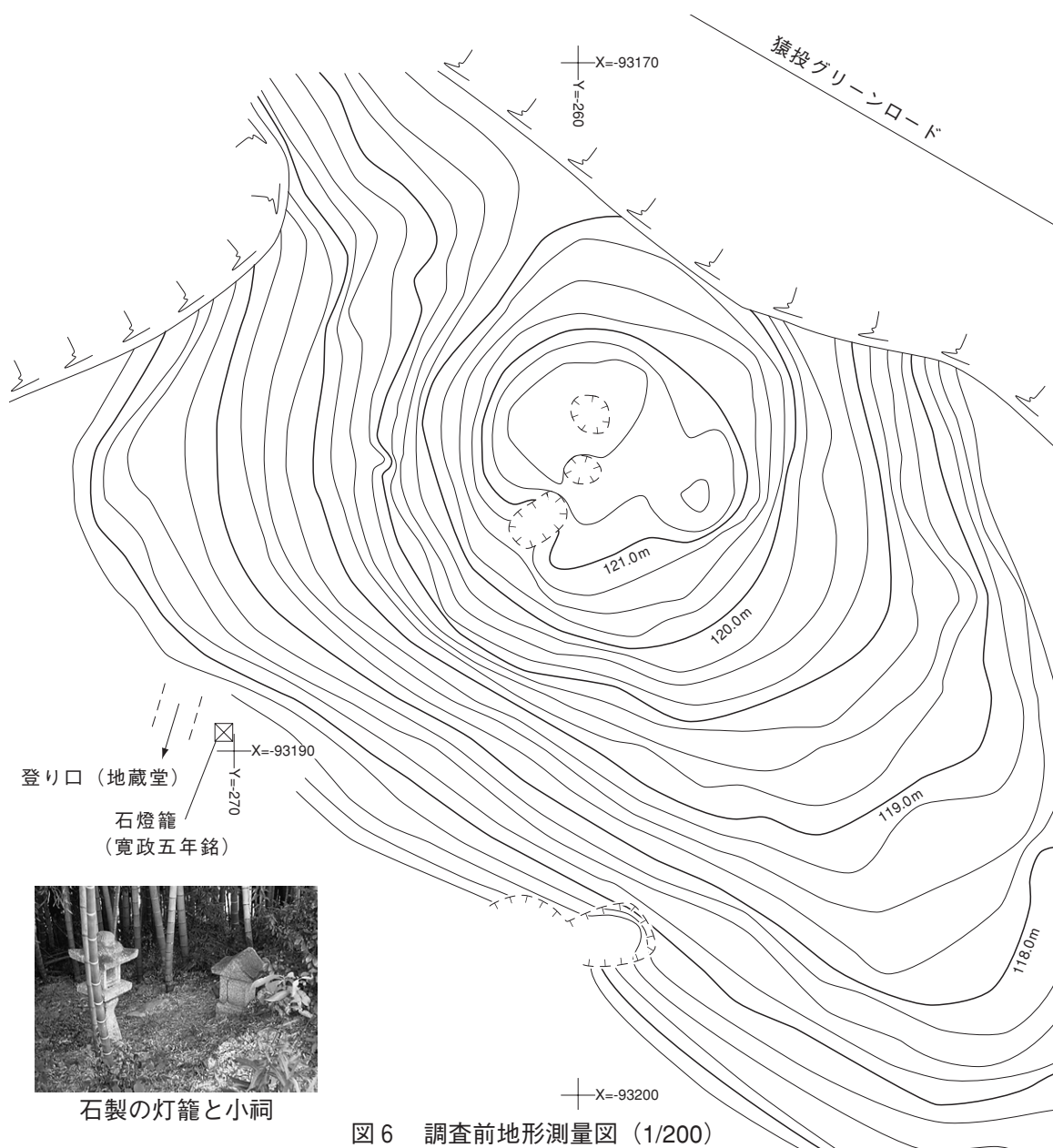


図6 調査前地形測量図 (1/200)

五年」と読める刻書がある。しかしこれらの石製品設置の目的や古墳との関わりについては不明である。

測量調査時点での墳丘表面の状況は、墳丘頂部から南西斜面にかけて石室の一部とみられる礫が露頭し、石室は損壊を受けながらも残存していることが想定された。

(2) 墳丘

調査の経過 発掘調査は墳丘構造の調査から開始した。まず横穴式石室に直交する方向で墳丘を横断する土層断面ライン（中央セクション）を設定し、層位を確認しながらライン南側の墳丘土を掘削していった。また、中央セクションと平行に調査区北端にトレンチ（北トレンチ）を掘削し、墳丘北端の立ち上がりおよび周溝を見い出そうとした。しかし、このトレンチでは明瞭に把握することができなかったため、墳丘北西隅で尾根筋方向と平行にトレンチ（周溝トレンチ／周溝セクション）を掘削し、墳丘後背に位置する周溝の確認を行った。その他図示した土層断面ラインの設定位置は図7のとおりである。

表土および攪乱・流出土（図8） 中央セクションの観察によると、墳丘表面から10～17cmの厚さで黒褐色のしまりのない細粒砂層（1層）が堆積する。この層は表土層で、竹根・地下茎が網の目状に伸び、その間に砂があるといった様相である。表土層からは条痕文土器片が出土している。その下層（2層）は締まりのない褐色細粒砂層が厚さ0.2～1.5mで堆積している。墳丘からの流出土であり、盗掘坑（後述）の土層もこれに含まれる。

盗掘坑 調査日誌抄（第1章）に記したとおり、石室東側にて表土除去中に確認された溝状の掘り込みおよび礫群を当初別の主体部として想定していた。しかし礫の出土状況や掘り込みが石室左壁の崩壊地点まで達していることから盗掘坑であると判明した。盗掘

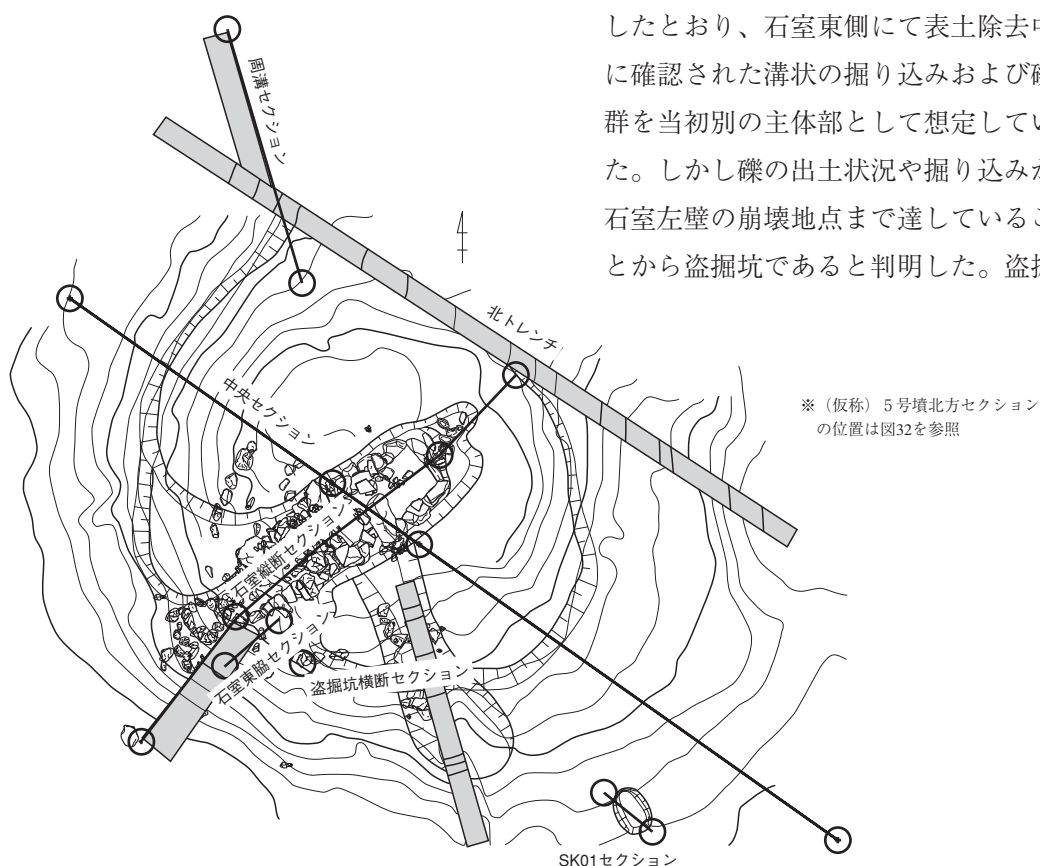
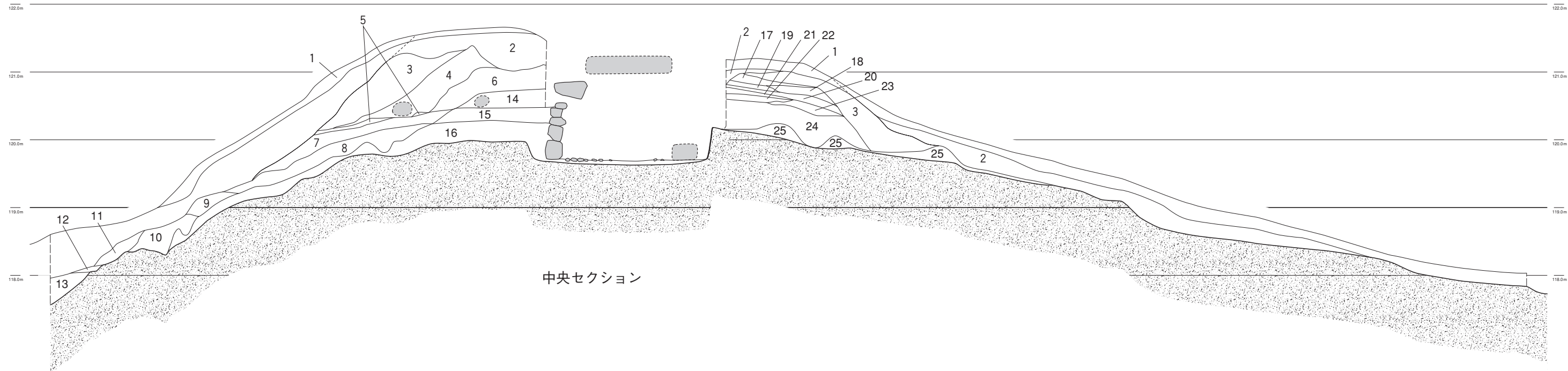


図7 土層断面ライン設定位置図



中央セクション

(中央セクション土層説明)

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 10YR3/1 黒褐色 細粒砂 しまりなし。表土。 | 14. 2.5Y 6/2 灰黄色 細粒砂 花崗岩粒あり。しまりあり。 |
| 2. 10YR4/4 褐 色 細粒砂 しまりなし。 | 15. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 花崗岩粒あり。しまりあり。 |
| 3. 2.5Y 3/2 灰黄色 細～粗粒砂 花崗岩粒多い。しまりあり。 | 16. 2.5Y 6/2 灰黄色 細粒砂 花崗岩粒あり。しまりあり。 |
| 4. 2.5Y 3/2 黒褐色 細粒砂 花崗岩粒少ない。しまりあり。 | 17. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 しまりあり。 |
| 5. 2.5Y 7/2 灰黄色 細粒砂 花崗岩粒あり。しまりあり。 | 18. 2.5Y 6/2 灰黄色 細粒砂 しまりあり。 |
| 6. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 花崗岩粒あり。しまりあり。 | 19. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 しまりあり。 |
| 7. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 花崗岩粒多い。しまりあり。 | 20. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 しまりあり。 |
| 8. 2.5Y 6/2 灰黄色 細粒砂 花崗岩粒多い。しまりあり。 | 21. 2.5Y 6/2 灰黄色 細粒砂 しまりあり。 |
| 9. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 花崗岩なし。 | 22. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 しまりあり。 |
| 10. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 花崗岩ブロックあり。 | 23. 2.5Y 6/2 灰黄色 細粒砂 しまりあり。 |
| 11. (9.と同じ) | 24. 2.5Y 5/1 黄灰色 細粒砂 しまりあり。 |
| 12. (10.と同じ) | 25. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 花崗岩粒・ブロックあり。 |
| 13. 2.5Y 5/6 黄褐色 細粒砂 | |

(石室縦断セクション土層説明)

- 10YR 3/1 黒褐色 細粒砂 落下石材多く露出。表土。
- 7.5YR4/4 褐 色 細粒砂 粗粒砂若干あり。しまりなし。
- 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂 1.と同様。
- 10YR 8/3 浅黄橙色 細粒砂 粗粒砂若干あり。しまり若干あり。
- 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 石室内落下石材多数あり。
- 5Y 4/2 灰オリーブ色 細粒砂 粗粒砂若干あり。しまりなし。須恵器出土。
- 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細粒砂 しまり強い。
- 2.5Y 8/1 灰白色 細粒砂 花崗岩粒多い。しまりあり。
- 2.5Y 5/1 黄灰色 細粒砂 花崗岩粒少ない。しまり強く、粘性あり。旧表土か。
- 2.5Y 7/2 灰黄色 細粒砂 粗粒砂若干あり。花崗岩粒あり。しまりあり。
- 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細粒砂 粗粒砂若干あり。花崗岩粒少ない。しまりあり。
- 2.5Y 7/2 灰黄色 細粒砂 花崗岩粒・ブロック多い。しまりあり。

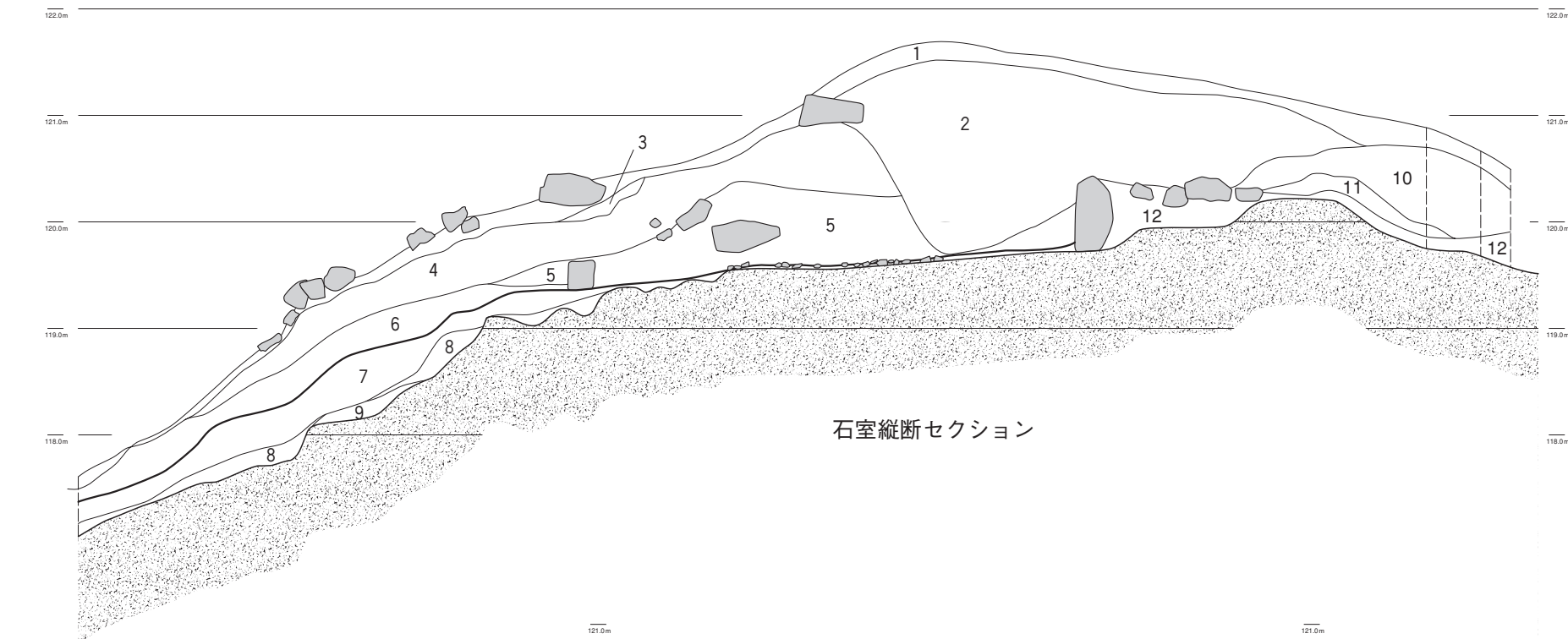
(石室東脇セクション土層説明)

- 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細粒砂
- 2.5Y 7/2 灰黄色 細粒砂
- 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細粒砂
- 2.5Y 7/2 灰黄色 細粒砂
- 2.5Y 7/2 灰黄色 細粒砂 花崗岩粒あり。
- 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細粒砂
- 2.5Y 7/2 灰黄色 細粒砂
- 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細粒砂
- 2.5Y 7/2 灰黄色 細粒砂
- 2.5Y 7/2 暗灰黄色 細粒砂
- 2.5Y 7/2 灰黄色 細粒砂 花崗岩粒あり。

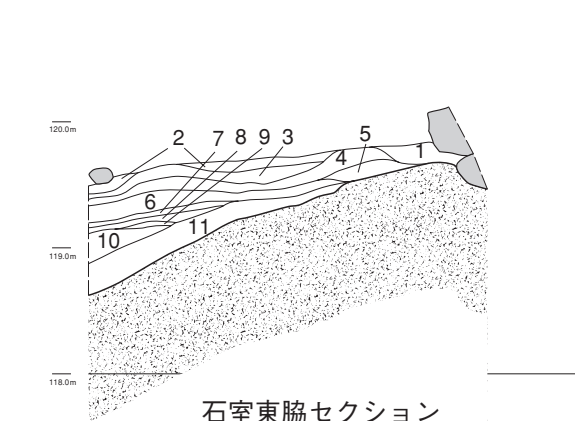
(周溝セクション土層説明)

- 10YR 3/1 黒褐色 細粒砂 しまりなし。表土。
- 10YR 4/4 褐 色 細粒砂 花崗岩粒少ない。しまりなし。
- 10YR 8/6 黄橙色 花崗岩粒主体に 2.5Y6/2灰黄色細粒砂が混入。
- 2.5Y 6/2 灰黄色 細粒砂 花崗岩粒あり。
- 2.5Y 8/1 灰白色 花崗岩粒・ブロック主体

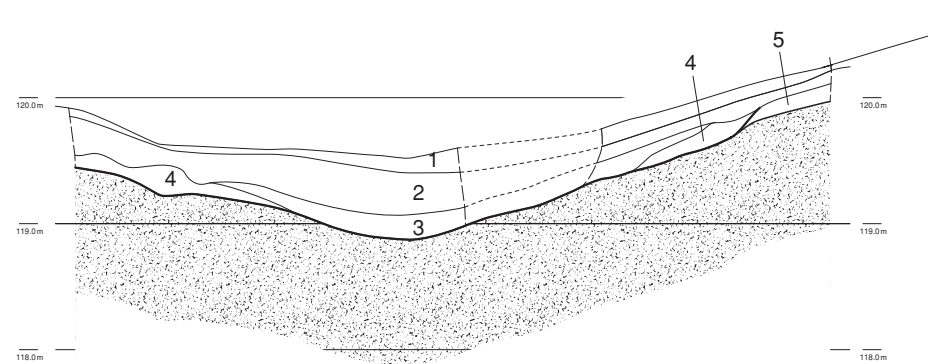
図8 墳丘土層断面図(1/60)



石室縦断セクション



石室東脇セクション



周溝セクション

坑は墳丘南東隅より始まり、石室奥壁に至る、全長約7m、最大上幅1.7mの規模で、底部は幅約1m程度の細い溝状に掘削される。石室内への影響であるが、土層のみでは判断しがたかったが、盗掘坑の延長線上の礫床がほとんどないこと、同様に副葬品が散乱したり副葬状態として疑わしい出土状況（後述）を呈することなどから、礫床の欠損部分については攪乱を受けていると考えられる。土層は締まりの弱い褐色中粒砂層であり、条痕文土器片が出土したが、副葬品に関わる出土遺物はなかった。土層中には左壁と奥壁の一部とみられる礫が含まれ、石室東側で約20点の礫が集中して確認された。礫は最大のもので最大径約60cmで、その大きさからもともと壁面石材であったことが推測された。

墳丘の土層（図8） 墳丘に関わる土層は、締まりのある3層以下である。石室西側の土層では、3層は一気に盛土されたと思われる、これを二次墳丘と考える。一次墳丘である4・6・14・15・16層は層厚が20～50cmで、石室右壁石材の1ないし2個分の高さに相当する。石材積み上げと同時に進行で盛土されている。4層の下にはテラ



図9 全石材・遺構全体図 (1/200)

スがあり、土止めのための墳丘内列石（後述）がある。なお14層にも列石があり、4層のそれと同様の目的で置かれたのであろう。なお、その外側に位置する7・8層も締まりが強く、踏み固めて盛土していると考えられる。

石室東側の土層は西側のそれとは様相を異にしている。二次墳丘は土手状に盛り上げた25層の上面を起点にして始まっている。一次墳丘の下半部は西側同様石材1ないし2個分の高さ（約40cm）を一気に盛土している。一方上半部（17～23層）は、層厚10cm以下を一単位とする、やや黒みがかった細粒砂層と灰黄色細粒砂層が交互に盛られ、版築状の土層となる。このような版築状盛土は石室左壁脇の石室東脇セクションでもみられる（図8）が、こちらでは地山面近くのレベルから開始されている。石室後背では奥壁の裏込めとなる層より土層が攪乱されて不明であるが、その外側に10～12層のような土手状の盛土がみられる。墳丘下に旧表土は全く認められず、墳丘築造時の造成で地山を大幅に削り込んでいることがわかる。削平でできた地山平坦面は石室中央を基点に直径約10mの円形である。

墳丘内列石 石室西側の墳丘を掘削すると、石室開口部より緩い円弧を描いて廻る2列の列石が確認された。これらの列石は中央セクション手前まで延びていた。次いで石室東側でも、開口部から始まる6点からなる1列の列石が確認された。いずれの列石も人頭大の円礫を中心とし、ほとんど石材を組み合わせることなく、一列に並べて配置されている。また、中央セクションより北側および石室東側の墳丘内では初めから石が配置された痕跡がなく、尾根の南側斜面際に限定して配置されたものであることがわかった。石室西側の列石は外側の列石が4層（二次墳丘）に、内側の列石は14層（一次墳丘）に対応しており、各層の最も外側に位置している。以上のことからこれらの列石は、最終完成時（二次墳丘完成時）には墳丘外面に表れない墳丘内列石で、各層の盛土にあたって特に崩れやすい箇所の土止めのために配置されたものと考えられる。

後背周溝（図9） 周溝トレンチで周溝の一部とみられる溝状の窪みが確認された。皿状の緩やかな窪みであるため、明確な周溝の範囲を示すのは困難だが、概ね6～7m幅で地山を掘り込んだと考えられる。なお、周溝の延長を石室東側では確認できなかった。周溝は墳丘後背の尾根筋を堀切状に延びている程度で、墳丘を取り巻くようには延びていなかったと考えられる。

墳丘の規模 以上のことから墳丘の規模が推定できる。地山平坦面範囲および周溝の位置、墳丘土層から直径約12m、墳高1.5m以上の規模と考えられる。

（3）横穴式石室

調査の経過 石室付近で出土した礫については、いずれも石室石材の可能性があったため、出土状況を図化した。そのうち原位置か

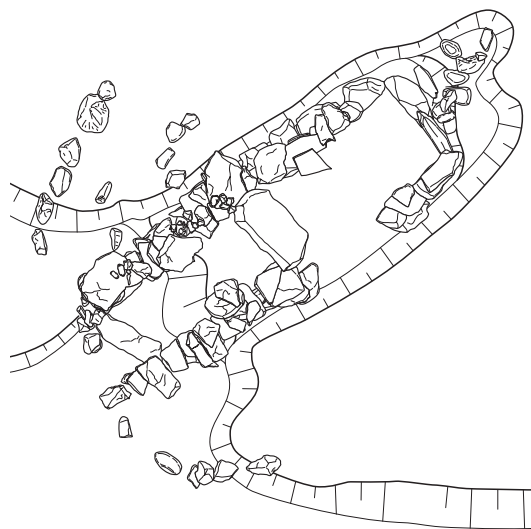


図10 原位置石材平面図（1/100）

ら移動していたり、残しながらの掘削が困難な礫については除去し石室内の掘削を進めた。

石室の位置と形状・規模（図11） 石室は墳丘の中央よりやや北側に奥壁がくるように配置され、主軸方向はN-50° -Eで、南西方向に開口する。単室で羨道のない無袖式に分類される。石室は梱石（後述）で玄室と前庭部に区分される。玄室の平面形は概ね長方形であるが、基底石の配置から右壁は緩い胴張り形を呈していることが看取される。残存長5.5m、玄室長4.6m、玄室最大幅1.4mである。

墓坑 ここでは石室構築のために地山を掘り込んだ範囲を墓坑とする。墓坑平面は馬蹄形の本体部に溝状の突出部が取り付く形状である。本体部の上端での全長は5.2m、最大幅は2.5mで、およそ標高119.5mの高さまで掘り込まれている。底面規模は長さ4.9m、幅1.9mであり、中央部が僅かに窪んでいる。墓坑壁面の立ち上がり角度は側壁で55～80°、奥壁で45°である。突出部は本体部の北西から右壁を延長する形で全長1.1m、幅0.8mを測る。突出部は本体部との間に約30cmの段差がある。なお前庭部側1.6m分は、地山が下り傾斜となっており、地山掘削のみでは平坦面は得られず、前庭部も含め暗灰黄色細粒砂で整地することによって、平坦面を確保している。

基底石と裏込め 墓坑底面および前庭部整地面に配置された石材は総数24点でこれらを基底石とする。左壁基底石の一部は盗掘によって移動もしくは滅失している。基底石の配置からは緩い胴張り形を企図したものと窺える。基底石は大きさまで最大径20～70cmである。奥壁基底石は2つからなり、西側のものが縦長64cm、最大幅71cm、東側のものが縦長72cm、最大幅58cmを測る。奥壁後背には、最大長20～35cmの円礫が疎らに配置されていた。裏込めと考えられる。しかし確認された礫より上層が攪乱を受けており、裏込め石材の大部分は失われたとみられる。

天井石 天井石は落下したものを含めて確認できたものは4点である。長径90～115cm、短径50～70cmの石材である。当然これだけではとても足りず、もともとはこれより倍以上の石材が架構されていたのであろうが、持ち去られたとみられる。原位置と考えられる天井石をもとに計測すると石室内法高1.2m、天井幅0.9mである。

奥壁 奥壁は基底石の項で述べたように基底石の2つしか残存していなかった。上半部は失われ、特に天井石との組み合わせ方が不明のままとなっている。

左壁（東壁） 左壁はその半ばが盗掘によって破壊を受け、石材が移動または滅失している。左壁面の傾斜角は84°で、直線的に内傾している。奥壁から約6mの箇所に縦方向に目地が通っており、そこまでは最大長80cm～100cmの石材が主体を占める。そこから前庭部側は60cm以下のやや小さい石材が中心で、明瞭な差となっている。石材の重量は、原位置に残存していたものの90%について計測し、総重量1977.1kg、平均44.9kgであった。

右壁（西壁） 右壁は基底石と奥壁付近の石材は60～80cmで大きめの礫が用いられているが、大半は25～50cmの石材で、いわゆる「持ち送り」によって積み上げられている。特に奥壁から3.5mの箇所より9mまでの間が小石材によって曲線をつくり出している。壁面の傾斜角は76°である。石材の重量は、左壁同様90%について計測し、総重量2720.5kg、平均32kgであった。左壁石材の多くが失われ、それと単純に比較することはできないが、概ね左

壁より右壁の方がより小さい石材を使用していることがいえる。

梱石（または框石） 側壁には立柱石は認められず、明確な玄門の位置を特定することはできなかった。しかしそれに相当するであろう位置に長径103cm、短径29cmの石材が置かれていた。石材は細長い不整形な円礫で、一番広い面を上面とする。この面と石室床面との間は27cmの段差が生じている。この石材は右壁基底石と一部で組み合っているため、右壁構築段階で設置されたものと考えられる。しかし前庭部の土層観察からは前庭部側が高かった事実は確認されず、框石の可能性を残しつつもここでは梱石として報告する。

礫床 玄室の床面は墓坑底面に暗灰黄色の細粒砂を薄く敷き、礫床となっている。礫床は河原で採取される径10cm以下の小円礫が主体で、これに破碎された花崗岩が混じる。確認できた礫床の範囲は、玄室中央部と盗掘による破壊を免れた左壁奥隅である。なお小円礫は盗掘坑や前庭部からは出土していない。礫床は疎密があり、床面を整えるという意図は確認状況からはあまり窺えない。奥壁付近は盗掘で持ち去られたとしても前庭部側は初めから敷設していなかった可能性が高い。

礫床面での遺物の出土状況（図12） 玄室礫床面では副葬品が出土した。ただし耳環2点は石室内埋土（石室土層セクション2・5層）からの出土で、礫床面からは浮いた位置での出土である。従って出土状況図には入っていない。盗掘坑範囲にあたる須恵器片（図14-16）とその上に載るようにして出土した勾玉（図14）は、その状況からして副葬時の位置であるとするには疑問であるが、礫床面と同一レベルであるため出土状況図に含めた。同様に左壁脇で直刀と銅製刀装飾が散乱して出土したが、盗掘が原因であろう。一方原位置と判断されるものとしては須恵器提瓶・鉄鏃・骨片がある。提瓶は左壁に接して胴部偏平面を下に横倒しの状態で出土した。中は空で若干砂の流れ込みがあった。鉄鏃は右壁寄りの礫床面で出土した。向きは不揃いで一部欠損したものもあったが、4～5本が副葬されていたとみられる。骨片は、鉄鏃が出土した付近で出土し、さらに左壁寄りでも出土した。被葬者のものとすれば位置的にみて脚部にあたると考えられる。その他には埋土を篩にかけると鉄鏃の一部と須恵器高杯？の小片（図13-18）が出土した程度であった。

前庭部 梱石より南側を前庭部とする。前庭部壁面の石積みがほとんどなく、明確な前庭部形状は不明だが、概ね「ハ」字形に開くであろう。前庭部の土層であるが、石室縦断セクション（図8）によると、7層以下では遺物が出土せずその上面が階段状を呈しているため7層上面が築造時の前庭部と判断される。6層特に上半部からは須恵器杯蓋・身が小破片となって出土している。そのほとんどが右壁寄りで出土した。古墳祭祀後の破碎処理が行なわれたのであろう。5層から上層は墳丘・石室の崩壊で流出した土層である。ここで問題になるのが梱石上面と前庭部との段差である。この石材が当初框石として設置され、前庭部もその上面と同じレベルまであったものが、追葬時に改めて前庭部空間を確保するために削られた可能性もあるが、土層からはそれを明確化できなかった。表土層上面では多数の円礫が確認でき閉塞石の可能性を考えたが、その下層からは礫が全く出土しなかった。従って墳丘・石室が崩壊した5層以上の土層形成時には既に閉塞石はなかったと判断される。

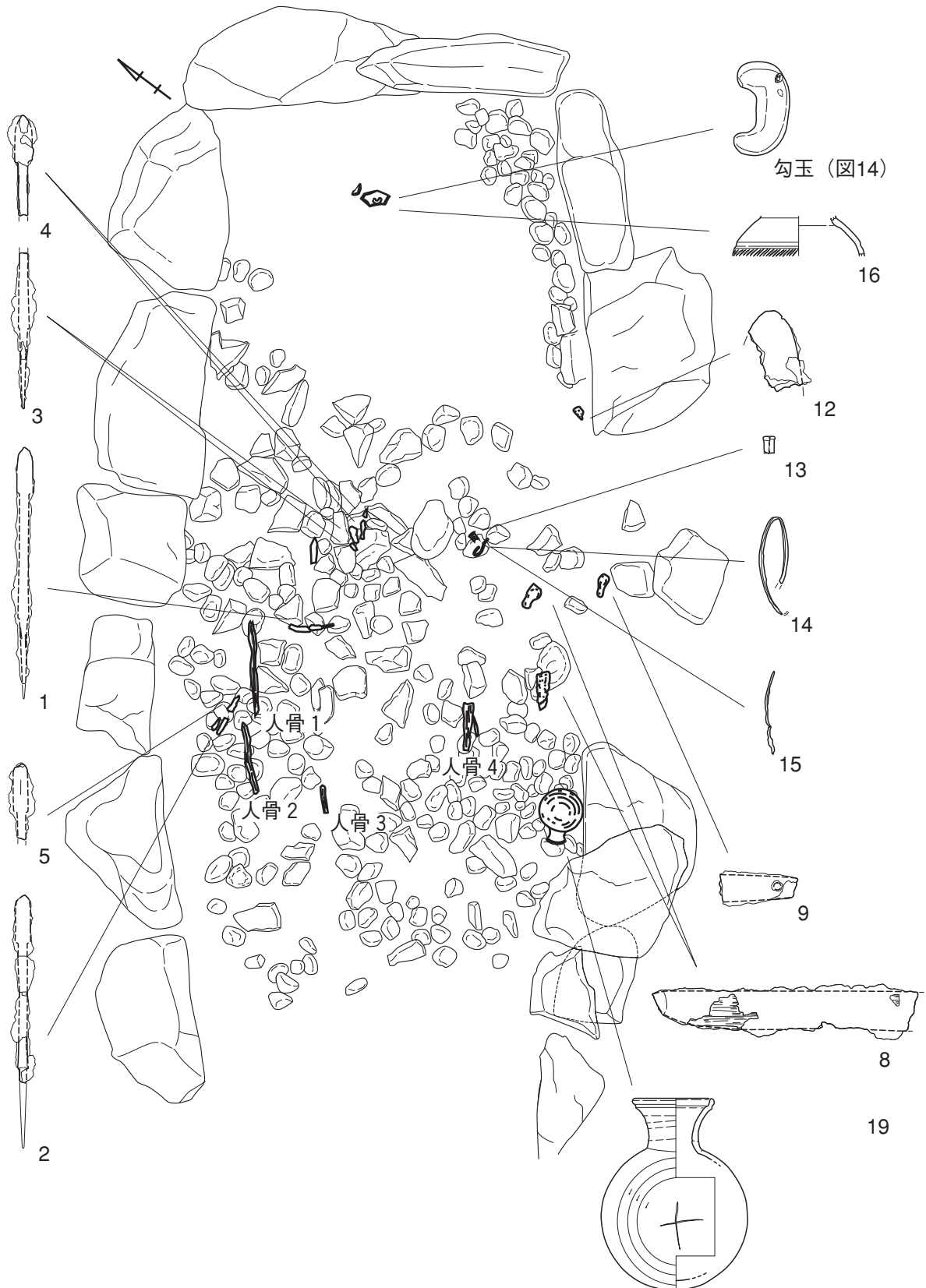


図12 石室礫床面遺物出土状況図（1/20、番号は図15の番号に対応）

第2節 古墳時代の遺物

(1) 須恵器 (図13)

須恵器の出土状況については前節で述べたとおりで、提瓶以外は小片となって出土した。このうち器形が復元できたものを中心に報告する。

杯蓋 (1～8) 杯蓋はいずれも頂部付近から外面1/3程を回転ヘラ削りする。器形は頂部が高く盛り上がり、稜線が明瞭に突出する。口縁部は内湾傾向のもの(1～4)、外湾傾向のもの(5・6)、どちらとも言えないもの(7・8)があるが、口縁端部に明瞭な凹線がめぐる点で共通している。焼成は4以外はいずれも良好。色調は4が明褐色を呈する以外灰色を呈する。8はやや小振りで口径12.8cm、それ以外は口径14.0cm前後である。

杯身 (9～14) 口縁が半ばで屈曲し端部が直立する傾向がある。体部稜線は明瞭ではないが残っており、底部付近のみ回転ヘラ削りを施す。比較的薄手のつくりである。色調は個々体で微妙な違いをみせるが、概ね灰色系のもの(9～13)と明褐色を呈するもの(14)に分かれる。14は焼成が甘く脆い。

提瓶 (19) 破損の全くない完形品である。口径7.5cm、器高19.5cm、胴部最大径14.9cm。円形の胴部からやや太い頸部(頸部最小径5.0cm)が伸びる。緩く外反しながら口縁部に至る。口縁部は稜線、口縁端部ともに丸みがあって全体に厚手な印象である。胴部は片面が偏平で、反対側は大きく膨らむ。偏平面は円弧にヘラ削りしているが、膨張面にはそれがない。また偏平面には焼成前に付けられた「十」字状の刻書がある。色調は青灰色呈し、青灰色系の杯蓋・身と似た焼成具合である。

その他・器種不詳 (15～18) 15は杯身の口縁部か。色調は青灰色。前庭部からの出土である。16は長頸もしくは短頸壇の胴部上半と推定する。丸く内湾しており、最大径部には鋭利な工具によるとみられる刺突文が施される。17は16と同様の色調(青灰色)で同一個体の可能性がある口縁部である。口縁は直線的で端部がつまみ出され外反する。18は高杯の脚部と推定する。端部は下方に若干つまみ出される。内面に自然釉が掛かっている。

年代観 須恵器の年代観について、指標となるのは杯類特に杯蓋であろう。口縁が内湾傾向のものは東山61号窯式期から蝸ヶ池古窯期(尾野1993)にかけてのものと思われる。外湾傾向のものは稜線の突出が甘く、内湾傾向のものに後続する型式であると考えられるが、東山44号窯式期の杯蓋口径より若干大きめであり、そこまでは下らないものと考えておきたい。従って現状の猿投窯編年(斉藤1995)によって両者の時期差を窯式名で示すことはできないが、ここでは各々の形態差を重視して、6世紀中葉から後葉にかけての範囲で2時期を想定しておきたい。しかしそれが古墳祭祀の回数に対応するかどうかはこれ以上の根拠が提示できないため明言できない。なお、提瓶は口縁稜線の甘い形状および石室内から単体で出土していることを考慮して須恵器杯蓋の2時期目以降、7世紀前半までを範囲として考えておきたい。その他器種不詳のものについては時期を特定する根拠に乏しい。

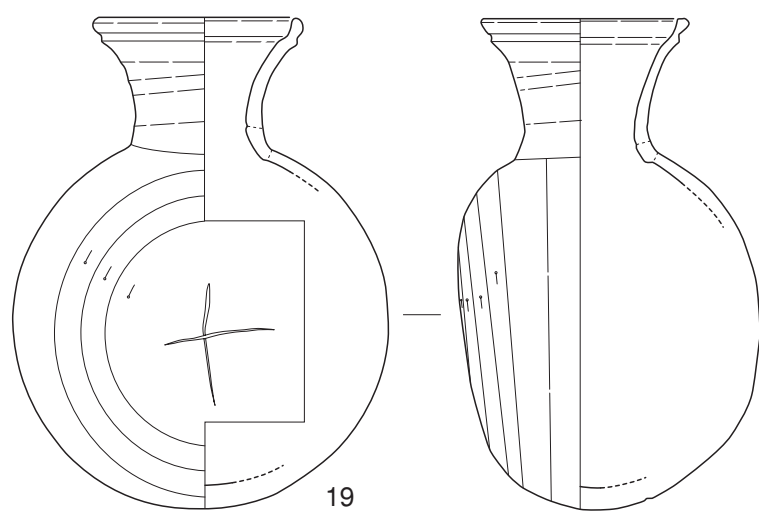
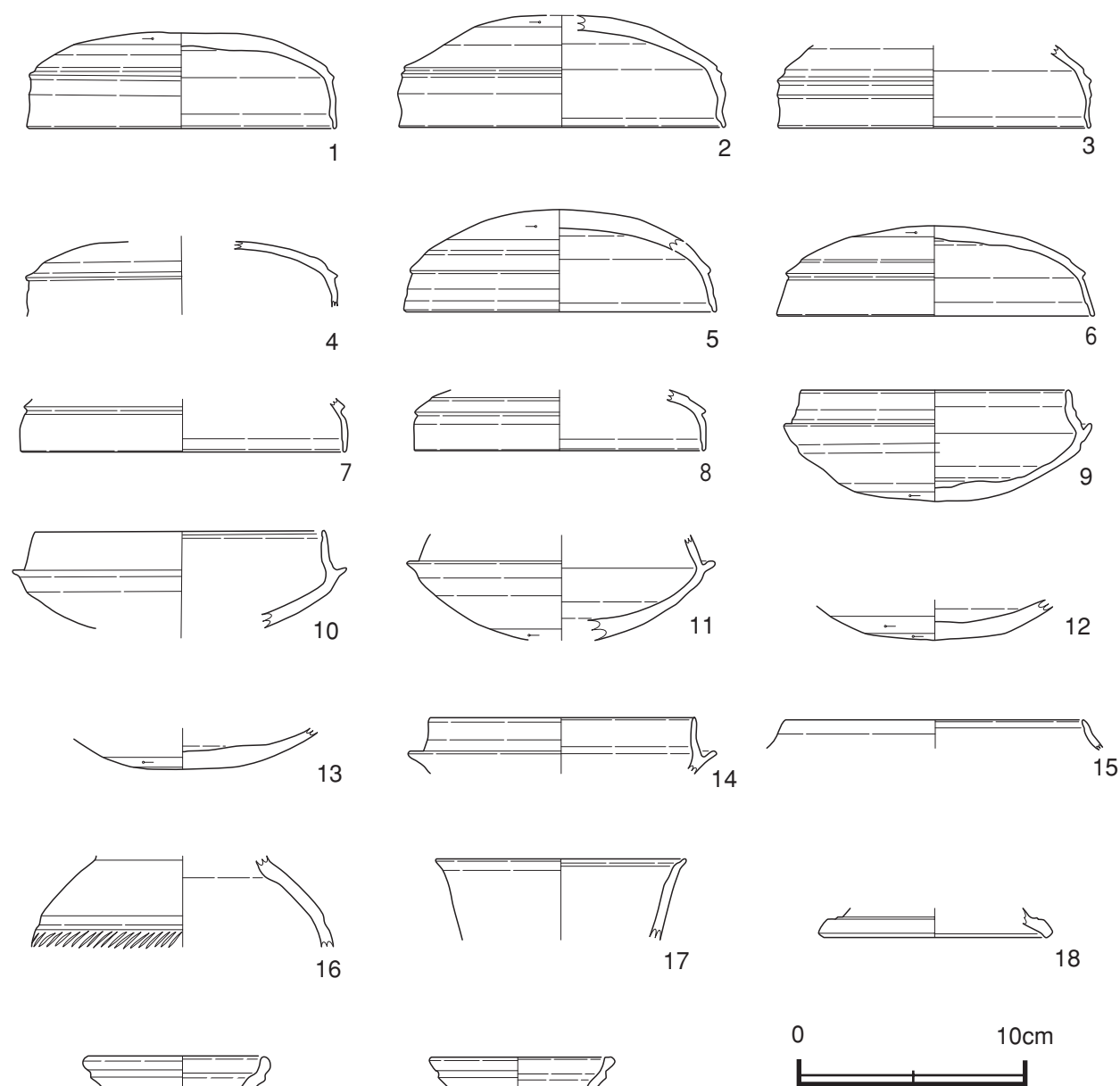


図13 須恵器実測図 (1 / 3)

表2 須恵器計測値一覧

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	出土遺構	登録番号
1	坏蓋	13.7	4.3	石室前庭部	E-1
2	坏蓋	推定14.4	(5.0)	石室前庭部	E-2
3	坏蓋	推定13.8	—	石室前庭部	E-3
4	坏蓋	推定14.0	4.6	石室前庭部	E-4
8	杯蓋	—	2.9以上	石室前庭部	E-5
5	坏蓋	推定14.0	4.1	石室前庭部	E-6
6	坏蓋	推定14.4	—	石室前庭部	E-7
7	坏蓋	推定12.8	—	石室前庭部	E-8
9	坏身	推定12.0	5.0	石室前庭部	E-9
10	坏身	11.6以下	4.7以上	石室前庭部	E-10
11	杯身	推定13.0	4.4以上	石室前庭部	E-11
12	坏身	10.6以上	1.8以上	石室前庭部	E-12
13	坏身	—	—	石室前庭部	E-13
14	坏身	11.8以上	2.5以上	石室前庭部	E-14
15	坏身?	推定13.2	1.2以上	石室前庭部	E-15
16	長頸埴?	—	4.0以上	石室床面	E-16
17	長頸埴?	推定11.2	3.5以上	石室奥壁裏	E-17
18	高坏脚部?	推定底径9.8	—	石室床面	E-18

(2) 金属製品 (図15)

鉄鏃 (1～7) 石室内で 表3 鉄鏃計測値一覧

散在していたものを接合した結果7点を計上した。うち鏃身部を有するものは4点である。鏃身部を見る限り全て細根鏃と考えられる。鏃身部は

番号	全長 (cm)	刃部			頸部			茎部	登録番号
		長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)		
1	(残存16.1)	3.1	1.1	0.4	8.5	0.7	0.4	(残存4.5)	M-1
2	(残存12.8)	3.2	1.0	0.4	8.6	0.7	0.4	(残存1.0)	M-2
3	(残存10.6)	—	—	—	(残存5.2)	0.7	0.4	5.4	M-3
4	(残存6.9)	3.2	1.2	0.5	(残存3.7)	(残存0.6)	0.3	—	M-4
5	(残存5.1)	(残存3.2)	1.0	0.4	(残存1.9)	(残存0.6)	0.4	—	M-5
6	(残存2.7)	—	—	—	(残存2.7)	(残存0.6)	0.3	—	M-6
7	(残存2.9)	—	—	—	(残存2.9)	(残存0.6)	0.4	—	M-7

片丸造で篋被部断面は長方形を呈する。1は茎部先端以外ほぼ全形を残す。残存長は16.1cmで、鏃身部は長さ3.1cm、最大幅1.1cm、篋被部は長さ8.5cm、最大幅0.7cmである。

直刀 (8・9) 鉄製の直刀である。8は刃部先端で残存長18.0cm、刃部幅2.7cm、推定棟幅は0.9mmである。全体に錆が激しく生じている一方で鞘とみられる木質が付着している。切先は直線的である。9は茎部で残存長は5.3cm最大幅1.9cmで全体に発錆が激しい。先端を欠いているが、その付近に円形の穿孔があり、釘状の何らかの止め具が貫通している。木質の付着はなかった。

不明鉄製品 (10～12) 器形不明の板状鉄製品の破片である。10は最大長2.8cm、11は最大長4.4cmで面が若干カーブしている。12は最大長2.8cmである。

銅製刀装飾 (13～15) 銅製の小片は直刀の刀装具である。13は懸緒孔で全長1.2cm、口径0.5cmの円筒状で一端が縁取りされている。14と15は細長い針金状の板を折り曲げたもので、責金具であろう。

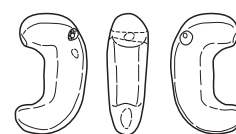
銅製耳環 (16・17) 2点ある。16は縦方向の外径3.1cm、横方向の外径3.3cm、内径1.5cmでわずかに横長な円形を呈する。断面径は0.8cmで銅芯である。17は縦方向の外径3.2cm、横方向の外径3.4cm、内径1.8cmを測る。断面径は0.8cmで銅芯である。自然科学分析によると耳環は2点とも純銅であることが判明した (第4章参照)。

表4 耳環計測値一覧

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	断面長径 (cm)	断面短径 (cm)	重量 (g)	登録番号
1	3.3	3.1	0.8	0.8	27.5	M-16
2	3.4	3.2	0.8	0.8	30.0	M-17

(3) 石製品 (図14)

勾玉 勾玉1点がある。瑪瑙製で橙色を呈する。コ字形に近い形状をしている。全長3.2cm、厚さ1.0cm、重量1gである。上端に穿孔がある。

図14 勾玉実測図
(1/2)

(4) 骨片

前章で報告した通り、石室礫床面直上からは、人骨と思われる骨片が出土した。いずれも竹根が入り込んで表面部分がかろうじて残存しているに過ぎず、状態は劣悪であった。人骨であれば腕か脚部に相当するであろう。取り上げた骨片は4点になる。骨片1は全長30.8cm、骨片2は全長23.7cm、骨片3は全長9.2cm、骨片4は全長15.2cmである。

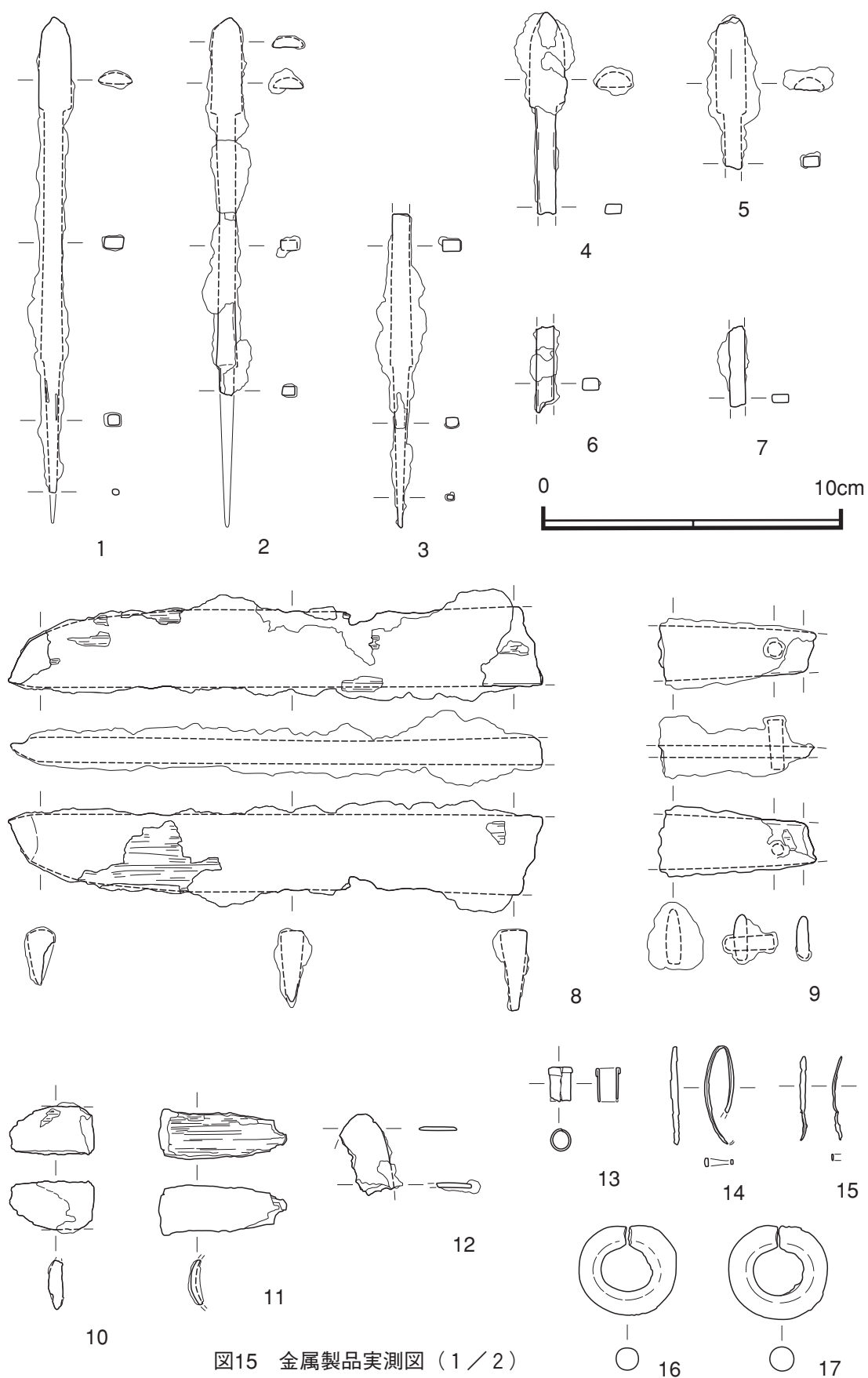


図15 金属製品実測図 (1 / 2)

第3節 古墳以外の遺構・遺物

(1) 縄文時代

遺構と遺物 当該期の遺構は確認できなかったが、墳丘・石室の各所からは縄文時代末の条痕文土器が出土した（図17-1～7）。破片総数は28点である。ほとんど小片であり全形が復元できたものはなかったが、器形は深鉢であろう。摩滅はそれほど進んでいないので、一帯で何らかの遺構があったところに古墳築造による地形改変によって遺構が滅失、遺物が散乱したものと考えられる。

ここでは特徴的な部位や大きな破片を中心に図化を行った。口縁部は5点あった。概ね端面を有するが、1は端面に凹線を施す。また3の口縁端部は折り返して成形されている。底部（7）は横方向に削痕がある。胎土は粗粒砂が多く混入している。色調は赤褐色のもの（1・4・6）と褐色のもの（2・3・5・7）に別れる。

(2) 中世

遺構（SK01） 墳丘東裾にて長径109cm、短径81cmの楕円形を呈する土坑が確認された。土坑は地山まで掘り込まれており、地山確認面からの深さは13cmである。土層（図16）は炭化物・炭化材小片を多く含む粗粒砂層であるが、明瞭な被熱痕跡は認められなかった。この層の上部付近からは中世の土器・陶器の小片が出土した。またSK01は墳丘からの流出土に一部が被われている。この土層は盗掘坑に伴うものと考えられ（第2章参照）、これらの関係からSK01が盗掘坑に先行することが想定される。出土遺物から戦国時代までは下らない時期が想定できる。なお今回の発掘調査において、中世の遺物はSK01以外からは出土していない。遺物の出土状況からは墓を想定するのは難しそうである。とはいえ付近の尾根上が中世の生活域になっていたとは考えにくい。従ってよりSK01の特殊性が窺えるのであるが、しかしその目的あるいは古墳との関わりを明らかにすることはできなかった。

遺物（図17-8～13） 8、9は土師器小皿である。色調は明赤褐色で、胎土は精良である。10は山茶碗である。色調は灰色で胎土は精良で砂粒はほとんどない。11～13は伊勢型鍋の口縁～頸部で11は伊勢型鍋に特徴的な折り返しの口縁部である。色調は褐色で砂粒が多い。以上の遺物は中世前半、13世紀代を中心とする時期が考えられ、SK01の年代もその頃に求められるであろう。

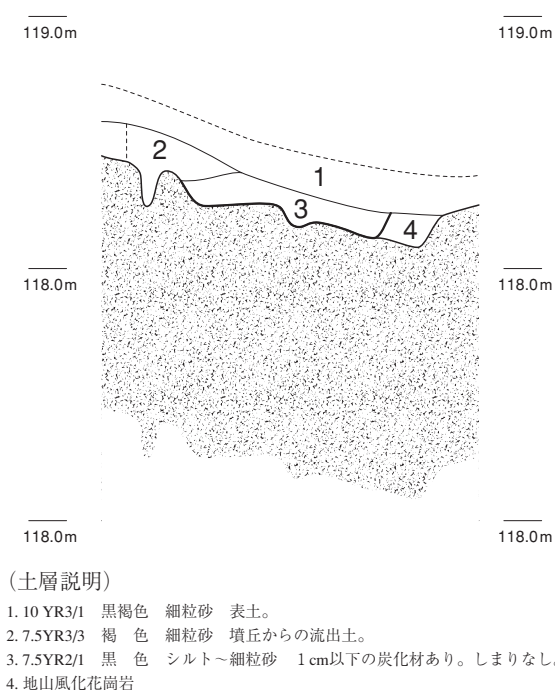


図16 SK01土層断面図（1/30）

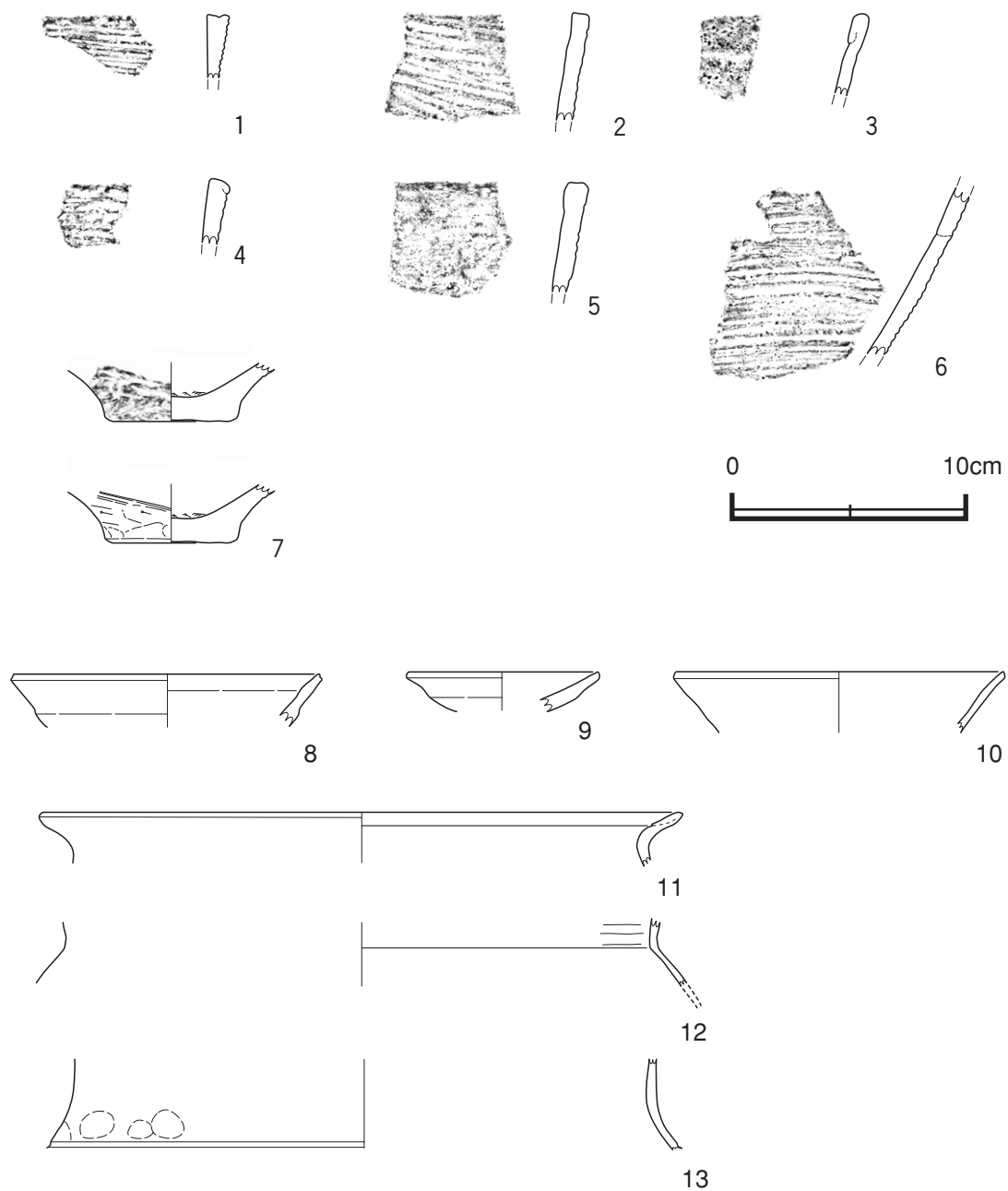


図17 古墳時代以外の土器・陶器実測図（1／3 1～7：条痕文土器、8～13：中世土器・陶器）

表5 中世土器・陶器計測値一覧

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	登録番号
8	土師器皿	(13.0)	(2.3以上)	—	E-27
9	土師器皿	(8.0)	(1.7以上)	—	E-28
10	灰釉系陶器碗	(14.0)	(2.6以上)	—	E-29
11	伊勢型鍋	(27.2)	(2.4以上)	—	E-30
12	伊勢型鍋	—	(2.6以上)	—	E-31
13	伊勢型鍋	—	(4.0以上)	—	E-32

第4節 耳環の自然科学的研究

東京文化財研究所保存科学部

平尾良光

鈴木浩子

(1) はじめに

(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターより、愛知県豊田市加納町寄元3号墳から出土した耳環に関して自然科学的な方法による調査の依頼があった。そこで蛍光X線分析法により遺物の化学組成を、鉛同位体比法により遺物の材料となった鉛について産地推定を行った。

(2) 資料

資料は愛知県豊田市加納町寄元3号墳から出土した耳環2点である。寄元3号墳は古墳時代後期(6世紀)と考えられている。耳環は都合上、耳環1、耳環2と称した。図18に資料の写真を示した。

(3) 分析法

(3)-1 蛍光X線分析法

1) 装置および測定方法

測定に使用した装置はセイコーインスツルメンツ(株)製エネルギー分散型微小部蛍光X線分析装置SEA5230Eである。この装置は直径0.2mmの一次X線ビームを資料に入射することができるため、微小領域の化学組成の測定に有効である。本測定では、所有者より金属試料の採取が許可されたので、その金属粉末を測定した。なお、この試料は鉛同位体比用の試料としても用いた。

今回の測定条件は次の通りである。

X線管球 : モリブデン (Mo)

管電圧・管電流 : 45kV・20 μ A

コリメータ : 直径1.8mm

測定時間 : 200秒

測定雰囲気 : 大気中

すべての測定において、元素濃度の算出は得られた蛍光X線スペクトル強度を理論的に解析するファンダメンタル・パラメータ法を用いた。

2) 結果と考察

測定した資料の蛍光X線スペクトルを図19、20に、そこから得られた化学組成を表6に示した。測定の結果、耳環1は銅100%、耳環2も銅99%で、微量に銀や鉄を含むとはいえ、

2点とも純銅であることがわかった。

(3) -2 鉛同位体比

1) 鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した(文献2)。一般に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことがいままでの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5~20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器(質量分析計)の感度が非常に良いため、1マイクログラムの鉛があれば十分である。また試料は青銅に金属部分でも鍍部分でも、同位体比は変わらないことが示されているので、資料からは鍍を微量採取するだけで十分である。本資料では、所有者より金属試料に採取が許可され、また資料自体も鉛を含まない純銅だったので、それらの金属粉末を鉛同位体比用に試料として用いた。試料から鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した(文献3)。

2) 鉛同位体比の測定

資料から金属を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2マイクログラムの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製全自動表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定した鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

3) 鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を表2で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位体比の図で示した(図21)。

横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値とした図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこの中にプロットした(文献4~8)。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛と推定される。Bは中国後漢および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域で、日本産鉛の範囲とした。Dは朝鮮半島産とされる多鈕細文鏡が分布する領域の中央線として示される。またAは弥生時代後期の銅鐸が集中した領域である。

横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値とした図をB式図と呼ぶこととする。

この図の中でA'、B'、C'、D'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。

これらの図の中に、測定値を○で示した。

4) 結果と考察

寄元3号墳から出土した耳環2点は、図3のA式図においてB領域に位置した。B式図ではC'領域に近いところに位置したが、今のところB領域産の材料を用いて作られた可能性が高いと思われる。古墳時代後期になるとより新しい鉱山が開かれているなど、この領域とは異なる領域が出てくる可能性がある。このようにはっきりと判断できない資料に関しては、今後古墳時代後期の資料測定が進みデータの蓄積がされた時に、もう一度考え直したい。

耳環2点はほぼ同じ値を示し、化学組成からも同じ材料で作られたと考えられる。

(4) 引用文献

1. 早川泰弘、平尾良光：各種の蛍光X線分析装置による文化財資料の分析；保存科学 37,137-145 (1998)
2. 平尾良光：鉛同位体比を用いた産地推定；考古学と自然科学4 考古学と年代測定学・地球科学,松浦秀治・上杉陽・藁科哲男編, 314-349,同成社 (1999)
3. 平尾良光,馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計VG-Sectorの規格化について；保存科学 28, 17-24 (1989)
4. 馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM No.370, 4-10 (1982)
5. 馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比からみた銅鐸の原料；考古学雑誌68,42-62 (1982)
6. 馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）；MUSEUM；No.382, 16-26 (1983)
7. 馬淵久夫,平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比-青銅器との関連を中心に-；考古学雑誌 73, 199-210 (1987)
8. 平尾良光編：古代青銅の流通と鑄造；鶴山堂 (1999)

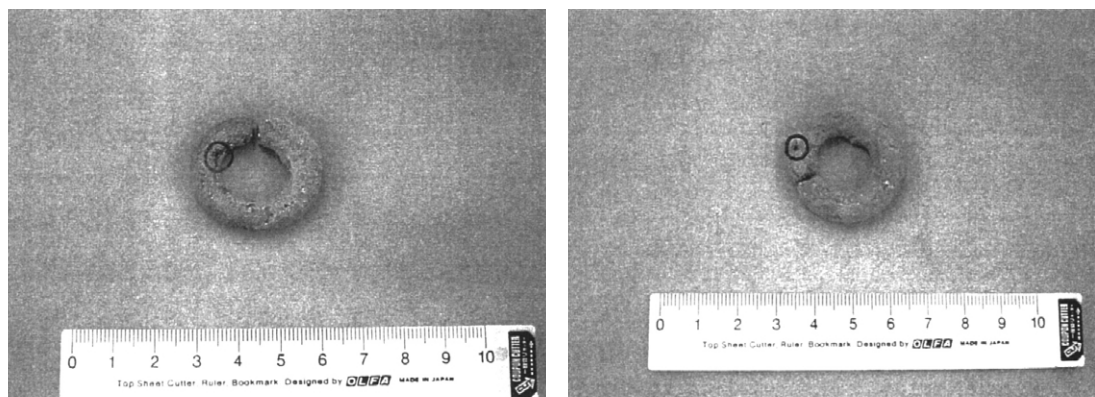


図18 耳環（左：耳環1、右：耳環2 黒丸部分から試料を採取）

表6 愛知県寄元3号墳から出土した耳環の化学組成

資料名	含有率 (wt.%)					
	銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	ヒ素(As)	銀(Ag)	鉄(Fe)
耳環1	100	0	0	0	0	0.1
耳環2	99	0	0	0	1	0.1

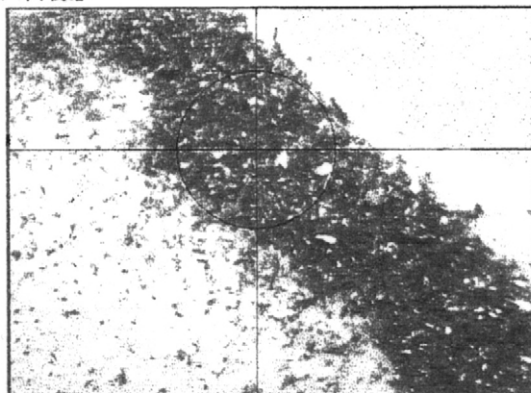
表7 愛知県寄元3号墳から出土した耳環の鉛同位体比

資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
耳環1	18.307	15.618	38.545	0.8531	2.1055	HS1046
耳環2	18.309	15.616	38.539	0.8529	2.1049	HS1047
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

[測定条件]

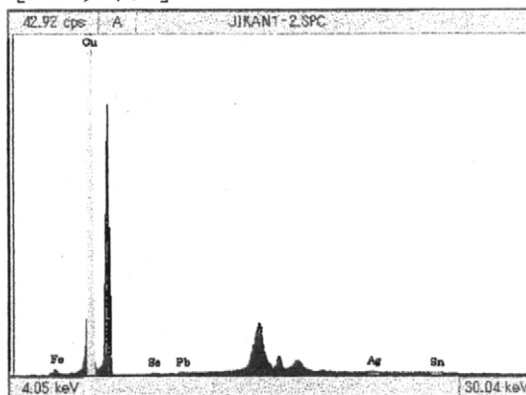
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	145
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	20
コメント	jikan1-2 耳環 寄元古墳 金属 2mm測定

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	2026.885	7.86- 8.22
26	Fe	鉄	K α	9.174	6.23- 6.57
50	Sn	スズ	K α	10.780	24.92-25.47
47	Ag	銀	K α	12.838	21.84-22.36
34	Se	セレン	K α	5.854	11.01-11.41
82	Pb	鉛	L β	7.886	12.42-12.84

図19 耳環1の蛍光X線スペクトル図と測定結果

[測定条件]

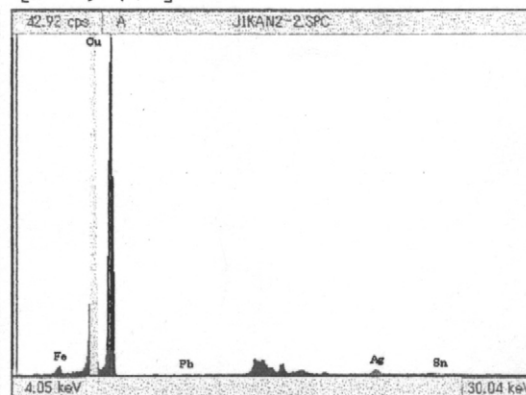
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	140
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μ A)	24
コメント	jikan2-2 耳輪寄元古墳 金属部 2mm測定

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	2624.279	7.86- 8.22
26	Fe	鉄	K α	13.020	6.23- 6.57
50	Sn	スズ	K α	8.641	24.92-25.47
47	Ag	銀	K α	15.546	21.84-22.36
82	Pb	鉛	L β	2.537	12.42-12.84

図20 耳環2の蛍光X線スペクトル図と測定結果

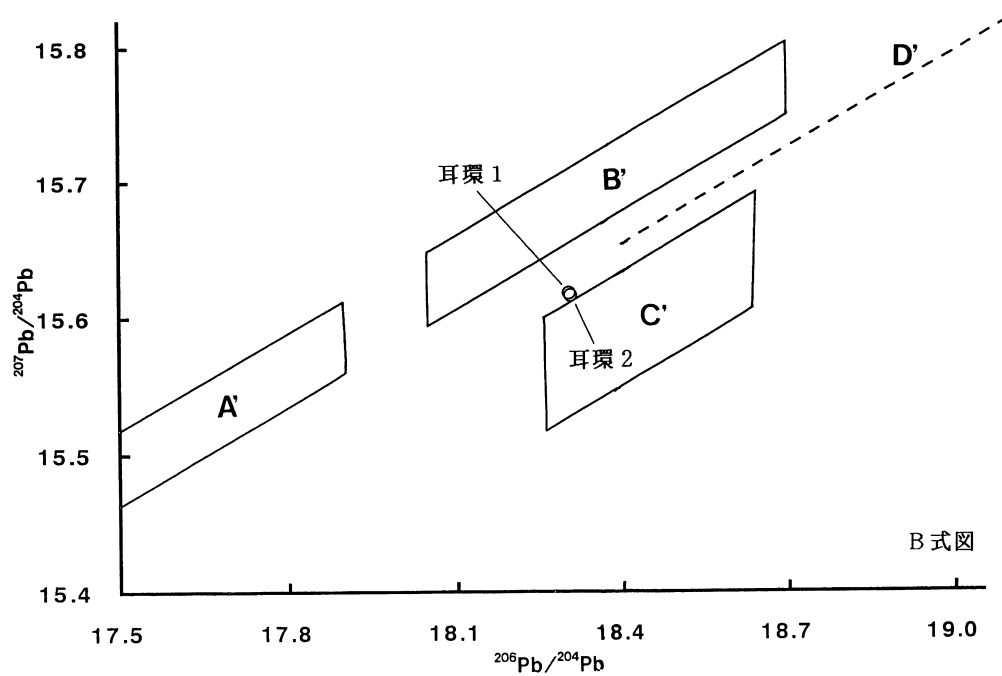
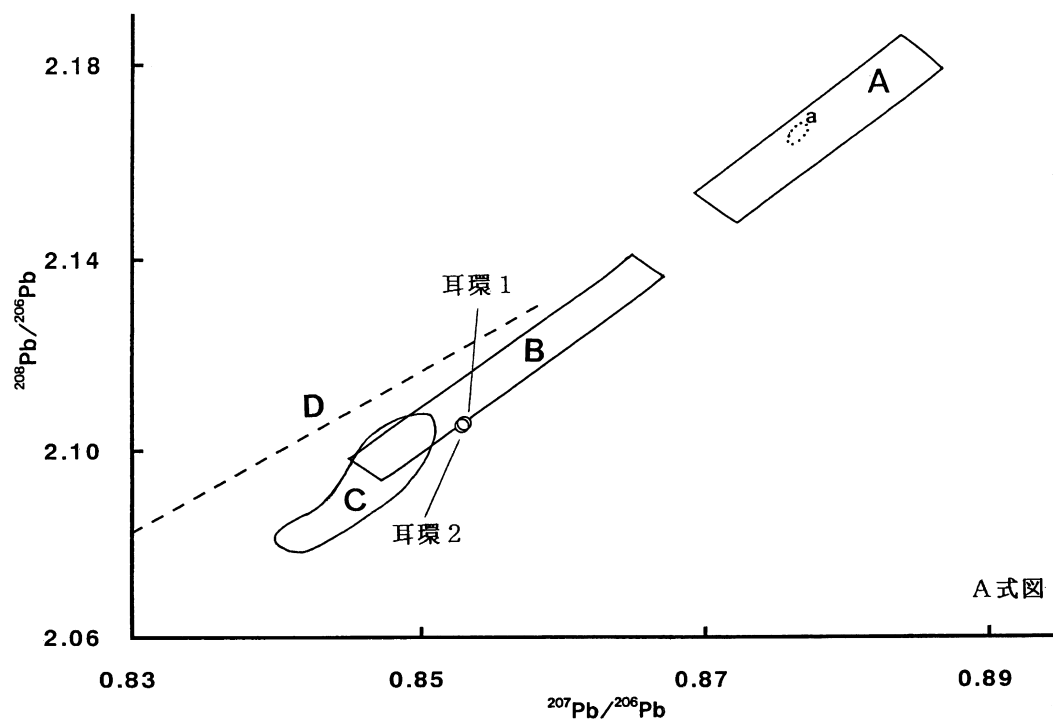


図21 寄元3号墳から出土した耳環の鉛同位体比

第3章 寄元4号墳の調査

第1節 寄元4号墳の調査経過

寄元4号墳は平成11年度の確認調査の際にB地区で新たに発見された古墳（S Z01）である。この平成11年度のB地区の調査は、当初は既に滅失した寄元1号墳に関連する遺跡の確認調査として調査を開始したものであるが、寄元1号墳に関連する遺構は確認されず、寄元4号墳が新たに発見された。

寄元4号墳調査日誌抄録（平成11年度）

- 4月20日（火） 調査区域は既に事業者によって伐採が行われていた。その調査区域および周辺の調査前地形を測量し、寄元1号墳の墳丘などの遺構が残存するか否か判定する材料の獲得に努めた。具体的には、仮杭2本を設定し、暫定的な地形測量図（25cmコンタ）の作成を開始した。
- 4月21日（水） 地形測量図作成を完了し、掘削前の状態を写真撮影する。地形測量図では特に遺構と思われる地形を読み取ることはできず、遺構の有無を判別できなかった。
- 4月22日（木） 猿投グリーンロード側の道路法面を清掃する。道路法面から石が4段重なった状態を確認した。盛土層などを特に確認することができなかったが、露見した石積状態が遺構となる可能性が考えられた。ただちに愛知県埋蔵文化財調査センターと協議の結果、確認調査を本調査に変更して行うことに決定する。
- 4月26日（月） 人力により表土掘削を開始する。T字にベルトを残し、黒い腐植土を除去する。
- 4月27日（火） 調査区西部・南部に散在する石材を測量し、写真撮影する。グリーンロード側の法面を垂直におとし、セクションを実測、写真撮影。墳丘東側に盛土層（約20cm）を確認した。
- 4月28日（水） グリーンロード側の法面で見られた石材の清掃、実測、撮影。調査区南部と西部を掘り下げるとベルトを中心とした位置に石材が露出した。
- 5月6日（木） 露出した石材の一部が墳丘外護列石である可能性が考えられた。遺物は依然として皆無。
- 5月10日（月） 表土掘削がおおよそ完了。全体の地形などから検討した結果、道路法面で露見した石積状態、および調査区南部と西部で見られた石列は、地山の粗粒花崗岩と一体化した自然のものと考えられ、人工的な遺構ではないと判断した。
- 5月12日（水） 念のため尾根脇部分の表土と客土掘削を進めた結果、南東斜面にて横穴式石室を発見。発見時の石材出土状態写真を撮影後、石室内の掘削を開始する。左壁の石積は5段以上あることを確認。
- 5月13日（木） 発見された小石室を寄元4号墳（S Z01）と称することとした。石室内部横断面の撮影と測図。石室掘形確認のため両脇にトレンチを掘削。一部に表土が残存する部分がありこれを下げる。石室内部は左壁側奥壁より掘削。石室検出状態の平面図作成。
- 5月17日（月） 石室内部縦断面測図。石室内部掘削（側壁が崩落しない程度にとどめる）。床面から小角礫が数個出土。右側壁そばで須恵器平瓶出土。出土状態の写真撮影。石室内埋土全部についてフローテーション（4mmメッシュの篩にて）を行う。崩落しかけた天井石2個を取り外す。石室上面平面図、右側壁立面図作成。
- 5月18日（火） 石室S Z01平面図補足測量。石室内掘削。側壁上位の崩落しそうな石材を取り除きながら両側壁面、奥壁面などを検出。石室外トレンチのセクション実測と写真撮影。
- 5月20日（木） 石室内部清掃、写真撮影。石室掘形の掘削。右側壁の石材取り上げ開始。石室平面図および側壁側面図作成。石室前庭部東半部の掘削、自然の岩塊を検出する。
- 5月21日（金） 石室の石材の取り外し。平面図、側面図作成。石材に通番をふり、石種と重量を測定する。S Z01の墓坑を掘削。
- 5月26日（水） 基底石を残して石材を取り外す。基底石測図。
- 5月28日（金） 基底石下場の清掃。掘形測図。S Z01周辺の測量。
- 5月31日（月） 基底石取り上げ後、清掃、写真撮影。敷石は基本的に存在しない。右壁の外側のトレンチをたちわり写真撮影。前庭部トレンチの写真撮影。
- 6月1日（火） 奥壁の巨石の除去。完掘状態の写真撮影。現地の発掘調査は終了。

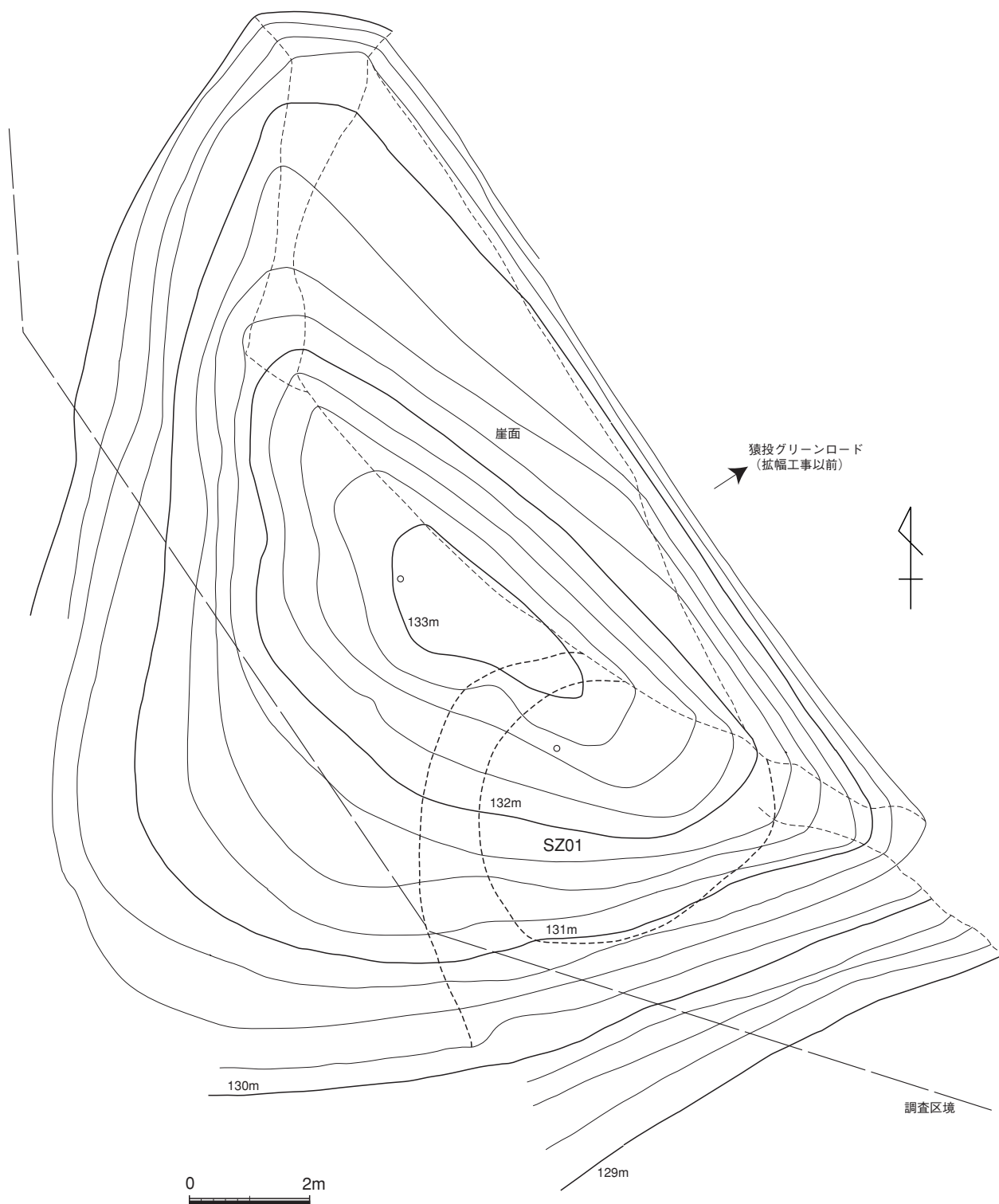


図22 調査前地形測量図 (1/100)

第2節 遺構

寄元4号墳は、南南東方向に開口する横穴式石室を内部主体とする直径約4.5mの円墳（推定）である。以下、立地、墳丘、石室の順で記述を進めていく。

（1）立地

調査区は、猿投山南麓の舌状にのびる尾根上の一角に位置している。調査区の北東部は猿投グリーンロードによって大きく削平されており、現状では旧地形を詳細に復元することは難しいが、尾根は北東方向から南西方向に傾斜しながら伸びていると考えられ、調査区の最高所は標高約133mを測る。南西方向の傾斜は尾根筋に沿うため傾斜は比較的緩いが、北西方向と南東方向の傾斜はやや急になっている。北西方向では標高130m付近から急傾斜となって深い谷に向かっており、南東方向では標高131m付近から傾斜がやや急になり標高129m付近からさらに急斜面となっている。山裾の平坦地との比高差は約30mを測り、調査地の地山は粗粒花崗岩およびそこに貫入する細粒花崗岩によって形成されている。

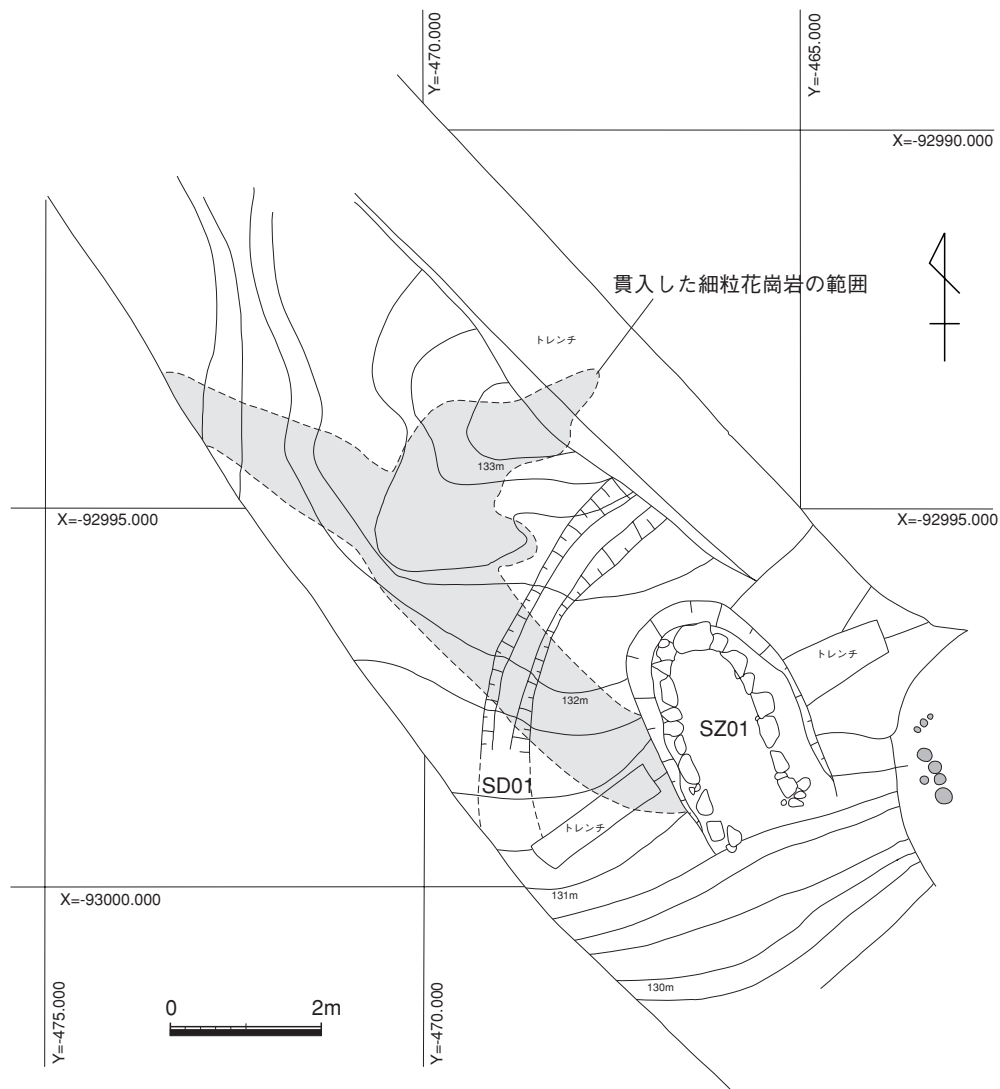


図23 調査区全体図（1/100）

寄元4号墳はこの尾根の南東斜面に立地しており、尾根筋の稜線上には所在しない。墳丘南端の最低位の標高は約130.8m、北端の最高位の標高は133.0mで、尾根稜線から墳丘中心部までは約5m離れている。調査前の現地の状況は雑木林であった。

(2) 墳丘

本墳の墳丘は、調査前の現況測量段階ではほとんど確認することができないほどの低い墳丘しか残存していなかった。これは、石室の残存状況が不良であったことからみて、開墾など何らかの理由で墳丘土の一部が流出してしまったものと考えられる。しかし、周溝の規模が浅く小規模であることなどからみて、もともとは低墳丘の古墳だったのではないかと推定される。

墳丘土層 墳頂部は腐植土などの表土を除去するとすぐに崩落した横穴式石室の一部が露出したため、この部分の墳丘土はほとんど残存していなかったといえる。一方、北東側（グリーンロード側）の土層断面で明黄褐色細粒砂の堆積などがみられ、これが寄元4号墳の墳丘の一部をなしていたと想定される。この土層断面で確認された墳丘盛土層の厚さは約20cmを測る。また、石室を横断する位置で古墳全体を断ち割った土層断面を観察すると、地山を掘り抜いて石室を構築した後にその周囲を充填した裏込め土（小石が混在する黄褐色細粒砂）がそのまま墳丘盛土に連続する状態を確認することができた。こうした細粒砂の堆積も古墳墳丘全体を覆っていたわけではなく、特に東半部で顕著に認められた。

周溝 墳丘の西部から北北西部にかけての範囲で極めて浅い周溝と思われる溝が確認された。北端部は道路法面によって既に失われ、南端部では斜面の傾斜に合わせて自然に周溝が消滅する形状となっていた。溝の検出全長は約4.0m、検出幅は0.5～0.9m、深さは最深部で0.12mを測るに過ぎない規模であった。表土を掘削し清掃した後に、結果として溝状の落ち込みを見い出した状態であったため、周溝の埋土などについては詳らかにできなかった。なお、墳丘東側の周溝は確認することができなかった。

墓坑 本墳の横穴式石室は地山に墓坑を掘り込んだ後に構築されていた。この墓坑は、尾根稜線に最も近接した部分を深く掘り込んでおり、その一番奥の部分に奥壁石を据えている。石室の開口部に向かって墓坑の掘り込みは浅くなっており、結果として墓坑の床面は開口部に向かってわずかに傾斜する（傾斜角約5°）くらいで、ほぼ平坦面となっている。墓坑の平面形は全長3.2m、最大幅2.0mの馬蹄形を呈しており、奥壁付近での墓坑の深さは1.2mを測る。断面形は概ね逆台形を呈している。墓坑の壁面は大部分が粗粒花崗岩が露出していたが、左壁から奥壁に向かって細粒花崗岩が貫入しており、この部分については十分に墓坑が掘削されていない箇所が認められた。

(3) 石室

石室の規模と形状 石室は、天井部の大部分が失われ、側壁も開口部付近の損傷が著しいが、玄室床面および下半部の残存状況は良好であった。天井石は奥壁側の3石が残存していたが、このうち開口部に近い2石は崩落しかかった状態であり、原位置を保っていなかった。検出状態での残存長は約2.58m、最大幅は約1.00m、高さは最大で約0.96mを測る横穴式石室である。

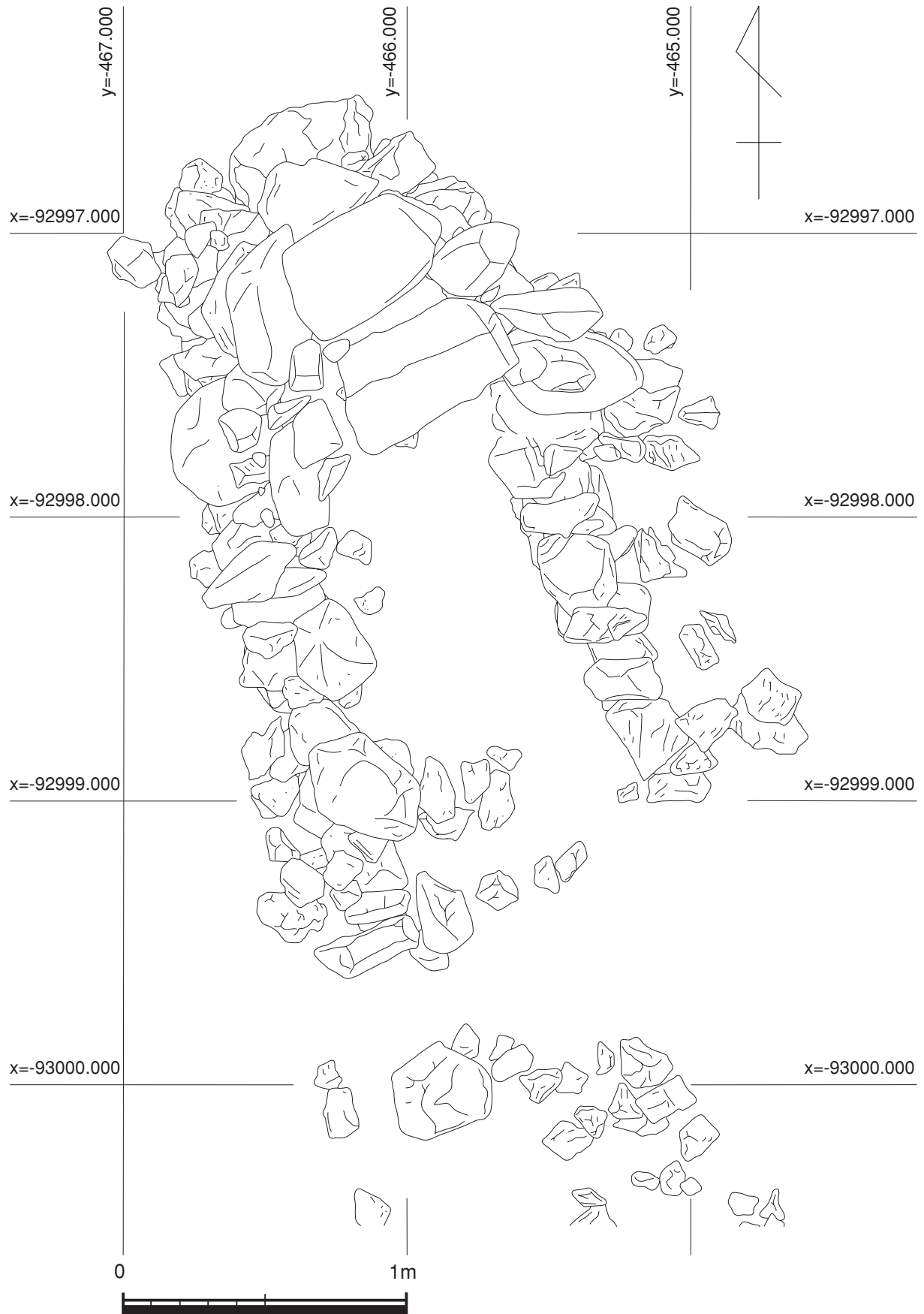


図24 検出全石材平面図 (1/20)

石室の平面形は無袖式である。平面形は、玄室の中央幅が奥壁幅や現存する開口部幅に比べて広がっていること、奥壁石が石室幅に比べ小さいため奥壁に近接した部分で急激に幅を狭めていることなどから、「奥窄まり胴張り形」（森2000）を呈しているといえる。玄室と前庭部との境界は、左壁で開口部付近に見られる縦長に配置された石材が立柱石と推測されることから、これを基準に区分して報告する。

玄室 玄室の規模は、全長約2.06m、奥壁部幅0.52m、中央部最大幅約1.00m、立柱石付近の石室幅0.92mを測る。奥壁は、最大高62cm、最大幅52cm、最大厚32cm、重量約206kgの大型石材1石を墓坑床面に直接縦位に立ててつくり、一番奥の天井石はその上に内側に前傾させながら積み重ねられている。奥壁石の下部は墓坑掘形の傾斜に立て掛けるように配置されており、奥壁石のみで自立できるよう工夫されていた。奥壁と墓坑掘形との間には小石が混在する黄褐色細粒砂が充填されていた。

側壁 側壁は左右とも、遺存状態が良好な奥壁付近で、6～7段の石積みが確認された。石材は原則として横長に用いて積み上げられ、右壁で若干乱れるものの両側壁とも目地はよく通った形で積まれている。両側壁ともに基底石の大部分は石材の最長面を石室内側に向けて

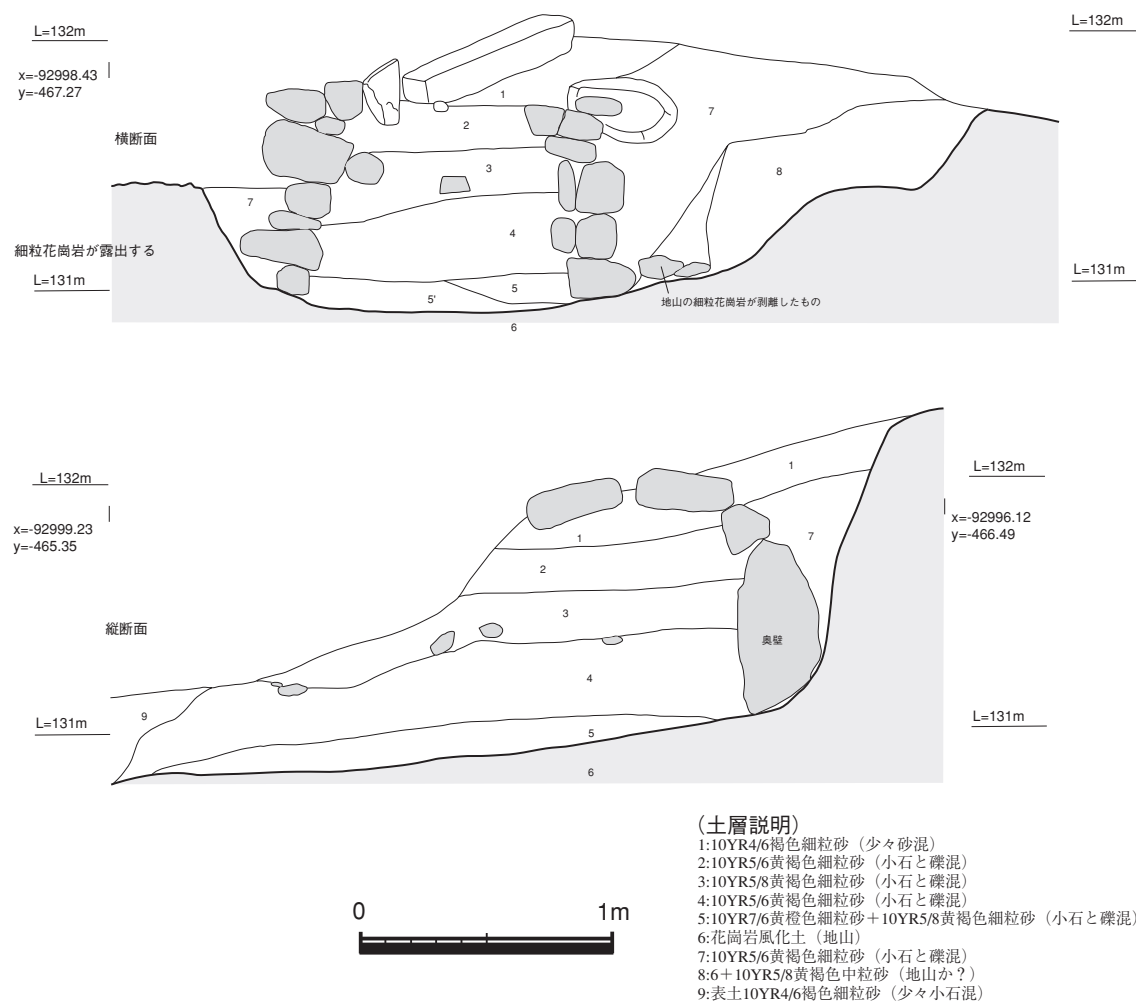


図25 墳丘・石室内土層断面図 (1/30)

面するように配置されているのに対して、上位の石積石材は小口面を内側に向けて使用される場合が多い。左右とも内傾しており、特に天井石に近い部分ではアーチ状に持ち送られた状態で構築されていたと考えられる。実際の石室を検出した段階では、右壁の上部と天井石が重なる部分が崩れて転落しかけている不安定な状態であった。この結果、左側壁も天井石が逆に持ち上がる形で変形し、石積みが外側に押し出されたような状態となっており、本来の石室の形状を保っていないと考えられる。

石室の石材（図27） 本石室の側壁は、左右で用材や積み方に若干の相違が認められる。本石室は奥壁石、天井石、側壁石とも大部分が細粒アプライトか中粒花崗岩が使用されてい

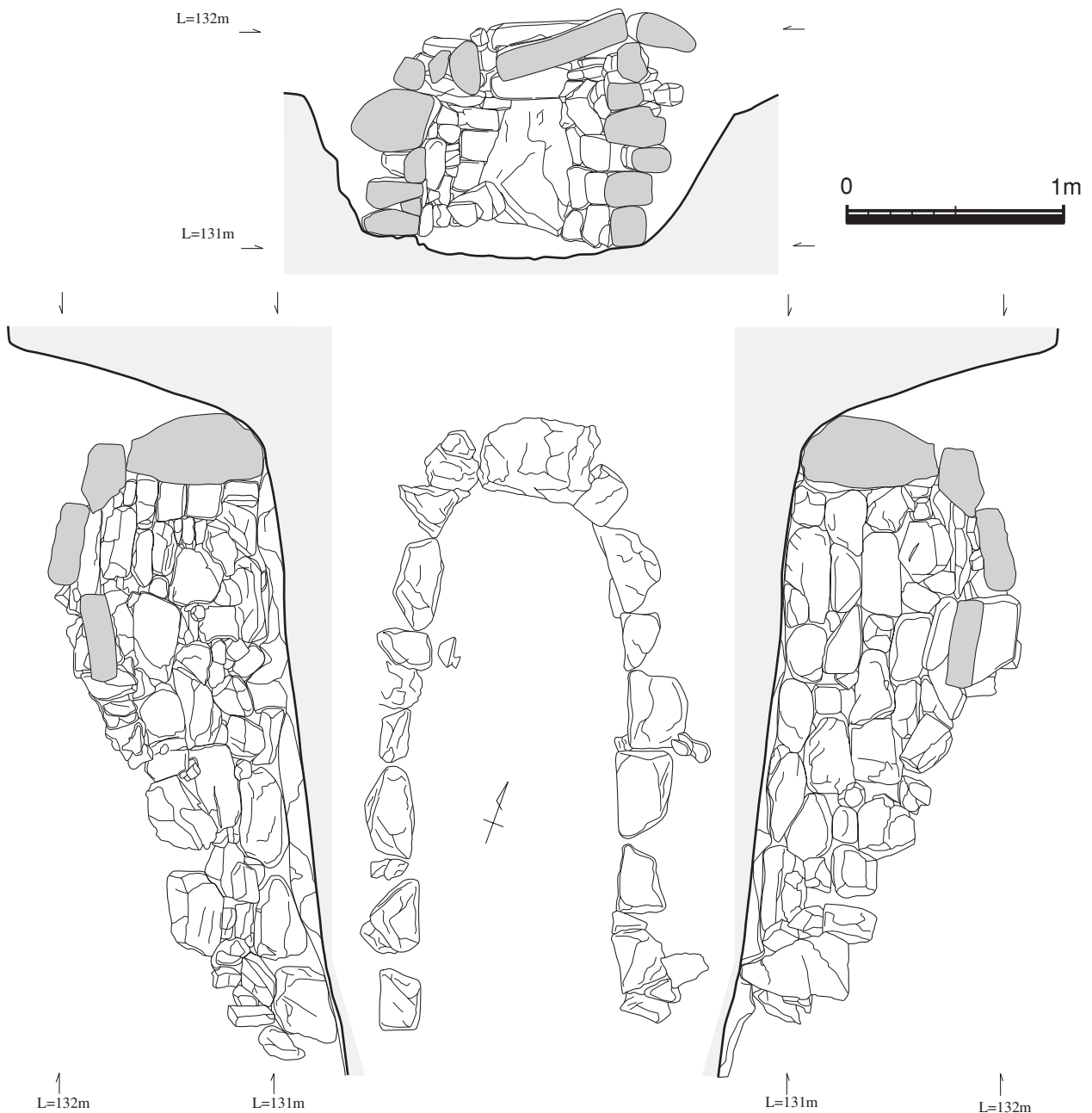


図26 石室平面・立面図（1/30）

るが、使用材の形状に着目すると角礫と亜角礫あるいは亜円礫の二者が存在する。左壁については中粒花崗岩の亜角礫あるいは亜円礫が比較的多用されており、石材の重量も20kg前後を測るものが多い。一方、右壁については細粒アプライトの角礫が大部分を占めており、石材も重量が40kgを超えるものが一定量存在する一方5kg以下の角礫も多用されており、規格性に乏しい。この石材の相違は石積みのあり方にも反映されており、左側壁は高さを約20cmに揃える形で一段ずつ重ねられているのに対して、右壁は大小様々な形状の石材が入り交じる形となっており目地が揃わない部分が散見される。右壁で立柱石が確認できないのも、左側壁に比べて粗雑に構築されていたことに拠るものかもしれない。また、右壁では基

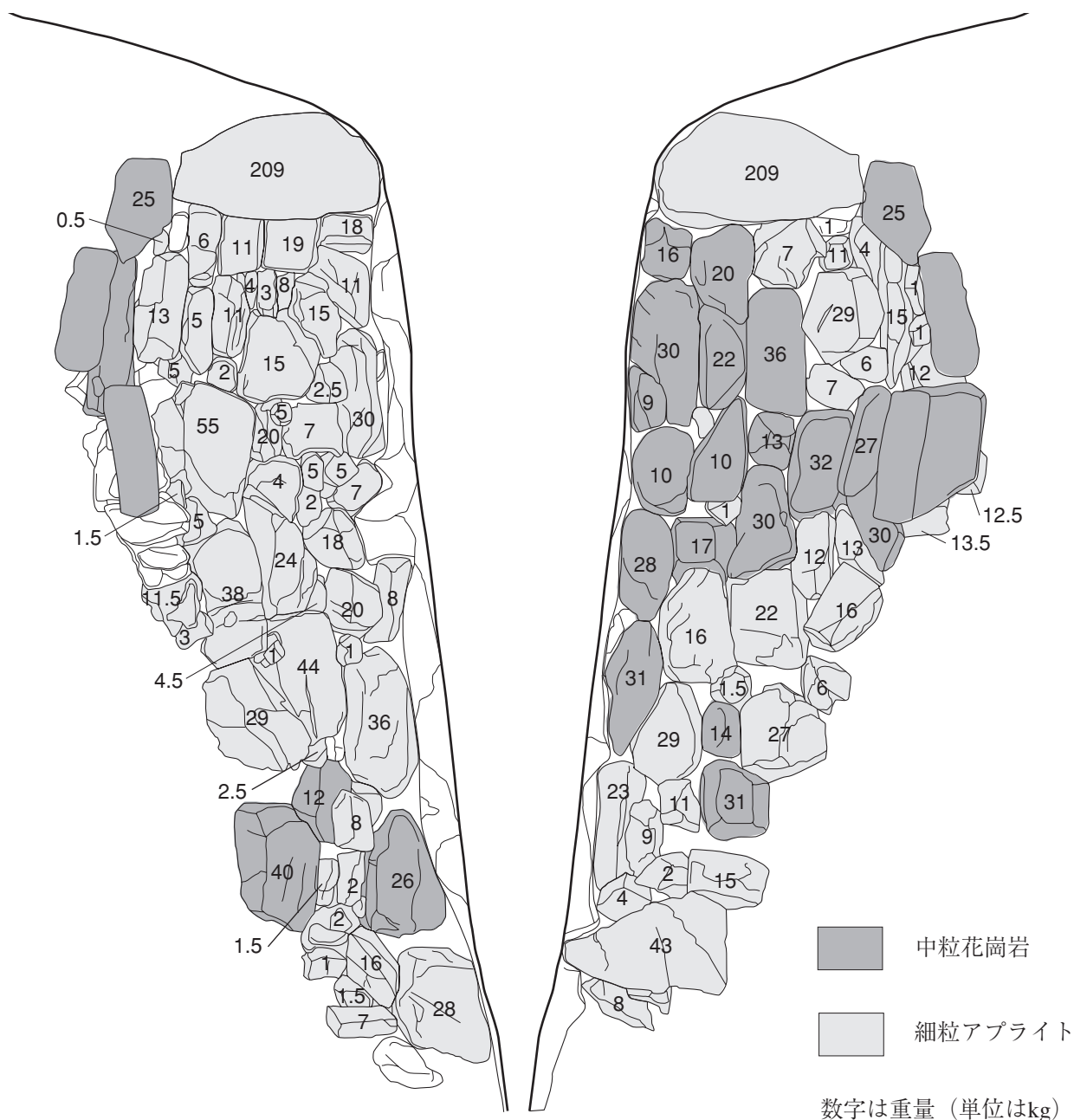


図27 使用石材の区分とその重量図 (1/50)

底石の部分で地山として露出した細粒花崗岩をそのまま転用しているケースも見られた。翻って、左壁に着目すると基底石から3段目までの石積みについては重量が20kg前後の亜角礫あるいは亜円礫を目地を揃えて積み上げているのに対して、4段目以上では大小の石が混在し（全体として小振りな大きさとなり）角礫が多くなり目地が揃わなくなっている。

角礫の細粒花崗岩は古墳近傍の貫入岩体の破片を利用したものと思われるのに対して、亜角礫や亜円礫の花崗岩は河川流域で産出され調査区まで搬入されたものと考えられる。このことから、搬入された石材が優先的に左側壁および基底石に使用され、不足分を臨機応変に近傍で産出される角礫で補充したのではないかと想定される。なお、角礫の平均重量は9.8kg、亜角礫や亜円礫の平均重量は20.2kgであった。また、奥壁と側壁の接合部についても、左側壁は奥壁石と密着するような形で一体感を持って構築されていたが、右側壁は複数の小振りな石材を組み合わせてつくられている。こうした状況からみて、本石室は奥壁→左壁→右壁の順に構築され、最後に両側壁上位と天井石を一体として積み上げていったのではないかと推測される。

床面 床面には若干の石材が散乱した状態で遺存していたが、基本的には敷石は存在しなかったと判断される。床面は地山を掘り込み、中粒花崗岩が露出していた。また、石棺などの施設の存在も窺い知ることはできなかった。

遺物の出土状況 本墳から出土した遺物は須恵器平瓶1点のみである。これは玄室内の右側壁中央部に近接した位置にあって、口縁部を石室内に向けて横倒しの状態で出土した。平瓶の内部は中空であった。須恵器平瓶出土地点の開口部側には長さ23cmの角礫が存在していたが、どのような意味があるのかは詳らかにはできなかった。

前庭部 石室開口部の前面斜面には大小様々な角礫が散在していた。多くは表土（腐植土）中に混在する形で出土しており、古墳構築当時の状況を反映した状態とは考えにくいものである。おそらく石室を構成していた石材や閉塞石などが散乱したものではないかと推測される。

第3節 遺物

本墳から出土した遺物は須恵器平瓶1点のみである。口径6.1cm、器高11.4cm、胴部最大径13.0cmを測る完形品である。にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。猿投窯系須恵器で高蔵寺2号窯式期に位置付けられ、暦年代は8世紀前葉と考えられる（齊藤1995）。

当該資料はあくまで石室内での古墳祭祀が8世紀前葉において行われていたことを示すものであるが、古墳築造の時期をその直前の近い時期に考えることには差し支えないであろう。

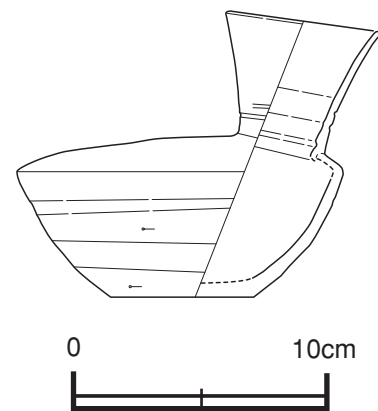


図28 須恵器実測図（1/3）

第4章 まとめと付論

第1節 寄元3号墳について

本節では、損壊で不明な部分があった寄元3号墳の墳丘・石室について、復元を試みることでまとめとしたい。

墳丘の規模 墳丘規模は直径約12m、墳高1.5m以上あることまでは明らかとなったが、墳高はどのくらいの高さが想定できるだろうか。中央セクションで確認された一次墳丘・二次墳丘上面の立ち上がり、同じ古墳群に属する寄元2号墳（後述）の墳高が約3mあることを傍証に、推定墳丘ラインを加えたのが図29である。しかし風化花崗岩を主体とする墳丘土は、比較的早い段階で流出し、2層が被った状態になったであろう。

石室の構造・規模 石室の奥壁上半部について、寄元2号墳の石室を参考にして復元することができる。上半部は径40～80cmの石材を積み上げ、側壁との関係は、左壁隅部の残存箇所から上半部では側壁面を奥壁側面で支えていたことがわかる。奥壁上端と天井石との関係は、奥壁上端に天井石が載り、奥壁と天井石が直角に組み合わさる状態が想定される。

基底石にも大小があり、奥壁基底石を含む左壁の奥から2.7m分と右壁の奥から3.8m分の基底石は最大径60～80cmの石材で占められる。一方開口部付近では最大径50cm以下の石材が用いられている。特に左壁では縦方向に比較的目地の通った箇所があるが、少しずつ組み合っており、石材を分類しながらほぼ同時に積み上げたものであろう。ちょうどこの地点から開口部側は盛土によって墓坑・前庭部を整地している点も注意しておきたい。右壁では奥から3.8mまでの範囲でドーム状に積み上げているが、残存石材だけでみると大きめの石材で縁取り、中を小さめの石材でカーブをつくっているように見える。このように左右壁で明瞭な違いをみせる積み上げ方については今後とも検討を重ねる必要がある。

遺物・被葬者について 前庭部出土の須恵器杯蓋から複数回の古墳祭祀（追葬行為を含む）の可能性を想定した。一方、石室内の副葬品は概ねセット関係として捉えてよいと思われるが、特色を引き出すまでには至らなかった。同様に、被葬者に関わる情報が乏しいのも事実で、周辺地域の古墳との比較検討を爾後の課題としておきたい。

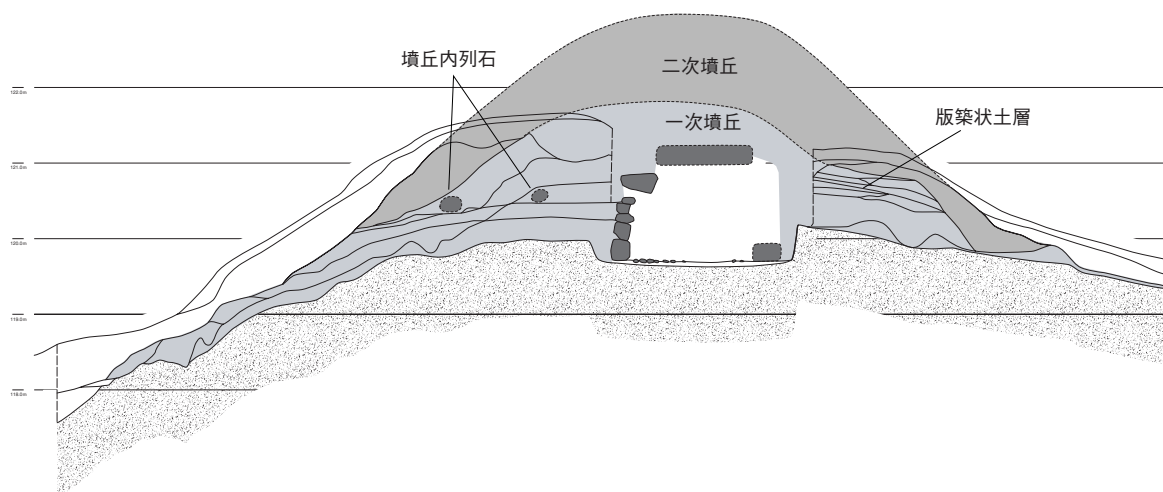


図29 寄元3号墳の墳丘の復元案（1/200）

第2節 寄元古墳群について

遺跡地図上でその存在が不確定であった寄元古墳群が、現地踏査の結果認知されるに至った経緯は第1章第1節で述べたとおりである。先に第2・3章において発掘調査の実施された寄元3・4号墳の遺構・遺物に関する記述を個別におこなってきたが、ここであらためて古墳群としての寄元古墳群について、周辺一帯での現況観察の結果報告と合わせて考察しておきたい。

寄元2号墳 2号墳は4号墳の所在する尾根の西隣を南北方向に延びる尾根のほぼ先端に位置する。現況では尾根全体が竹および雑木が繁茂する山林となっている。その尾根先端部が削平され、大松寺という無住の寺堂が存在する。削平は2号墳の直下まで行われており、残存する横穴式石室は削平でできた比高差約4mの崖縁に面している。大松寺の成立時期については不明だが、古墳を切り崩すことなく石室開口部前面に寺堂を構えている点に、何らかの意図的な配慮が窺える。ちなみに2号墳とその近辺は現在大松寺（約20戸程の檀家によって運営されている）の管理地となっている。しかし特に古墳に関わる行事は行っていないようである。

現況観察でわかったことは以下のとおりである。墳丘は直径約12mの円墳で、墳丘高は約3mである。墳丘北側の後背には高さ30cm程度の石積みを確認できるが、この部分だけ直線的になっており後世の改変によると考えられる。横穴式石室はほぼ真南方向に開口している。

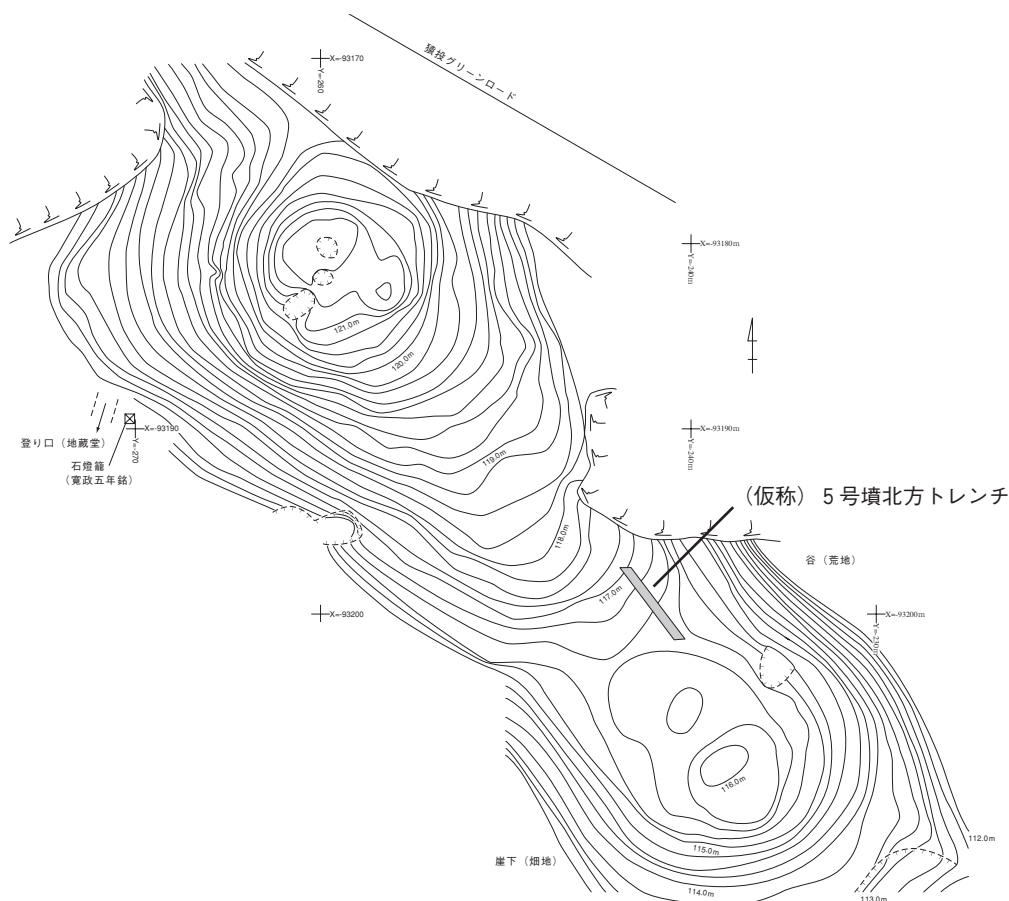


図30 寄元3号墳と（仮称）寄元5号墳地形測量図（1/400）

現況で確認しうる石室残存長は約1mで、奥壁での天井幅は0.7mである。天井石は2つ残っている。奥壁とは直角に組み合う。床面は埋没しており、埋土上面での横幅は最大で1.2mである。奥壁は向かって右下方にある石材が最も大きく、横幅60～70cm程の円礫、左下方の石材は横幅40～50cmの円礫である。この2つが奥壁の主要石材で、その上に人頭大の石材（円礫が主体であろう）を4～5段積み上げて奥壁としている。石室左壁は埋土上に4段が露出している。最上段は調整用にのせられた10～15cmの円礫である。その下段が最大の石材を用いており壁面で60×30cm規模の隅丸長方形の石材である。左壁は右壁に比べて目地が整っており、大きめの石材を使う傾向がある。この点3号墳と類似する。石室平面形は長方形であろう。

なお、石室開口部は崖縁に面しており、墳丘ともどもいつ崩壊してもおかしくない危険な状況である。何らかの保存のための措置を講ずる必要があろう。

（仮称）寄元5号墳 3号墳の所在する尾根上に、3号墳の南東方向に隣接するようにして緩やかな地形の高まりが確認できる。この高まりを仮に5号墳と呼称して紹介しておきたい。現状では民家のすぐ北側の崖上に位置し、竹林となっている。地形は3号墳墳丘東端から南東方向へ下り傾斜となっているが、そこから約2m下ったところで今度は30～40cm程度の高まりとなる。この高まりはほぼ円形を呈する。さらに南東隅の崖縁の面したところでは丸くカーブしており、不自然な等高線を描いている。円形高まりの直径は約13.5mで、中央部に溝状の窪みが観察された。この窪みの方向は3号墳石室とほぼ同じ方向である。窪みの脇には長軸50cmの扁平な礫が地表面に露出しているが、後から移動してきたものであろう。それ以外に石室の存在を伺わせる礫は確認されなかった。この円形高まりの一部が調査区内にかかっていたため、3号墳中央セクションの南東延長線上にてトレンチ（（仮称）5号墳北方トレンチ）を掘削し、墳丘後背の周溝の確認を試みた。地山面まで検出したところで、溝状の落ち込みが確認できたが、土層観察では3号墳からの流出土の続きとなる褐色細粒砂層が落ち込みの底まで達しており、比較的新しい時期のものと判断した。従って、現状で古墳の存在を窺わせるのは円墳状に見える等高線のカーブのみであり、積極的に古墳であると肯定するだけの根拠に乏しい。今後の調査研究にゆだねるしかない。

その他の古墳の存在 3号墳所在地の旧地権者によると、3号墳の東隣に存在した尾根

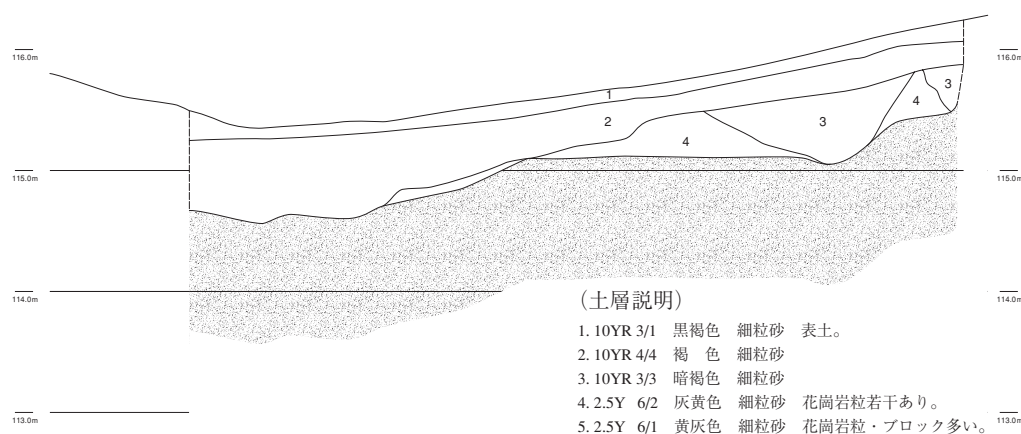


図31 （仮称）5号墳北方土層断面図（1/60）

筋上でも「瘤」状の地形の高まりがあったが、猿投グリーンロードの工事で失われたという。記録がなく今となっては確かめようもないが、近隣の尾根上には近世以降の墓が点在しており、古墳に限らず何らかの遺跡があったのかもしれない。

古墳の築造順序 以上の観察結果、確実に古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳と言えるのは寄元2～4号墳の3基であり、現状ではこの3基をもって一つの古墳群と認識することとしたい。このうち3号墳は6世紀中葉、4号墳は8世紀前葉の築造であることが発掘調査によって明らかになった。問題は2号墳の位置付けであるが、3号墳に準ずる規模の石室で、その構造に4号墳の石室とは隔たりが看取される点や、石室の開口方向が3号墳の南西方向、4号墳の南南東方向の中間とも言える南方向である点から、両者の中間の時期のうやや3号墳に近い時期に位置付けられるのではないだろうか。この想定に立てば、寄元古墳群では、時代が経るに従って徐々に台地に面した丘陵地末端からやや奥まった地点へと立地場所を移動していることになる。

近隣の古墳群との比較 最後に、石室構造をもとに箆川流域の後期古墳群の中での寄元古墳群の位置付けを行なってみよう。箆川上・中流域で見かけ上把握できる古墳時代後期の古墳群は、寄元古墳群以外に5つある（上ノ段古墳は単独墳と捉える）。すなわち上流から地家古墳群、神郷古墳群、広沢古墳群、池田古墳群、藤山古墳群である。このうち地家古墳群と神郷古墳群は近接しており1つの古墳群と認識することもできよう。しかしそれでも群を構成する古墳の数は10基に満たない。寄元古墳群を含む他の古墳群も3基程度から成り、それは尾根を少しずつ違えて立地している。このように見かけ上少数の古墳があまり密集しないで構成される古墳群のあり方が、西三河地方の後期古墳群によくみられることは既に指摘されている（三田2001）。ちなみに上ノ段古墳は猿投川と広沢川の合流点の微高地に単独で立地しており、見晴しの良い台地縁辺に単独で立地する傾向の強い矢作川中流域の中期古墳のあり方に類似している。

箆川流域での横穴式石室の導入は、無袖式の上ノ段古墳と擬似両袖式の藤山1号墳が創始であり、ともに6世紀中葉とみられる。矢作川中流域での横穴式石室の分析から、西三河では竪穴系横口式石室の伝統を引く無袖式に対し、後発の擬似両袖式石室が周辺古墳の石室構造に影響を与えながらやがて主体を占めていく流れが把握されている（森2001）。寄元3号墳の石室は基本的には無袖式であるが、その成立にあたって一部に胴張形を取り入れているところなど、藤山1号墳をはじめとする擬似両袖式石室の影響を受けたことは十分考えられる。しかし寄元古墳群ではその後、擬似両袖式石室の築造技術を全面的に導入する機会はなかったのではないだろうか。2号墳の石室については細部が不明であるがおそらく3号墳と同様の無袖式であったと思われる。そして4号墳の石室は池田1号墳にみられる奥窄まり形を呈するが、その一方で胴張形とはならず、しかも片方だけに立柱石を配する。古墳終末期であるこの頃には立柱石の意味は形骸化したものであったろうが、それ以上に石室築造に際し断片的な情報に基づいたためではないだろうか。このように寄元古墳群では、古墳築造の最終末に至るまで少しずつ周辺の古墳から影響を受けつつも、無袖式石室の構造を大きく変更させることはなかったのである。

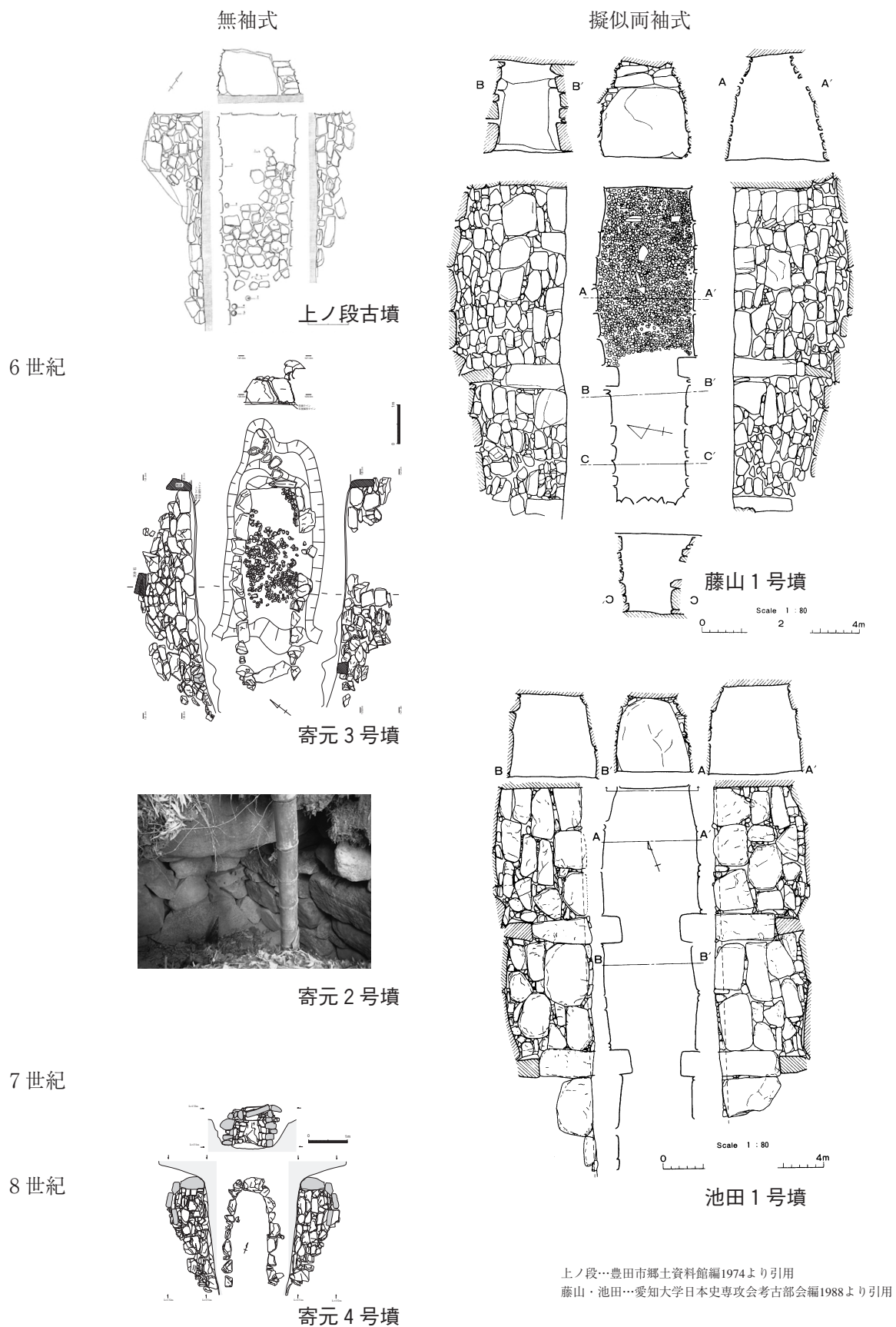


図32 簗川流域の横穴式石室の変遷 (1/150)

第 2 部

上ノ段遺跡

Uenodan Site

第1章 序説

第1節 調査の概要と遺跡の環境

愛知県豊田市加納町字上ノ段地内では、猿投グリーンロードの拡幅工事が行われることとなった。この建設予定地内には、子持勾玉や土師器が出土した上ノ段遺跡（愛知県遺跡番号63057：愛知県教育委員会1995による）が所在しており、事前に発掘調査が必要となった。そこで、平成10年度に豊田市教育委員会と愛知県教育委員会が建設予定地内における遺跡範囲確認調査を行った結果、該地で遺物の散布が認められたため調査区域内においても上ノ段遺跡が良好に残存することが確実となった。このため、平成11年度に愛知県道路公社から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが上ノ段遺跡の発掘調査を実施することとなった。調査は平成11年6月2日から平成11年6月27日までの期間に250㎡を行った。調査に際して用いた遺跡名の略号はⅡPUDであり、調査の都合上、調査区は99A区と99B区に分けて実施した。発掘調査の結果、古墳時代から近世までの遺構や遺物を確認することができ、約40基の遺構と破片数で約450点の遺物が出土した。

上ノ段遺跡は猿投川に開析された狭長な谷底平野のほぼ中央段丘低位面の微高地上に立地する。遺跡の位置は北緯約35度9分25秒、東経約137度10分20秒で、現地形の標高は約94mを測る。調査区の西側には箆川が流れており、遺跡を含めた周囲一帯は畑や水田となっていた。調査区は調査直前の時点で畑となっていた。北側には猿投グリーンロードが接しており、東側約300mには県道深見亀首線、南側約500mには県道加納東保見線がそれぞれ走っている。現在の地形や地割りは昭和40年代後半に行われた猿投北部ほ場整備事業によって形成されたもので、微地形などについては既に旧来のものを残していない可能性がある。なお、このほ場整備事業に伴い、昭和46年に上ノ段古墳の発掘調査が豊田市郷土資料館によって行われている。



図1 上ノ段遺跡位置図（1/5000） 平成3年度版豊田市基本図を改変

第2章 調査の成果

調査の結果、耕地整理に伴うと推測される整地土層とわずかに残存した黒色遺物包含層が確認され、そこから古墳時代から江戸時代までの遺物が約450点出土した。黒色包含層直下の遺構面から奈良時代の掘立柱建物跡などが確認された。

第1節 遺構

(1) 基本層序

上ノ段遺跡は谷底平野の段丘低位面に所在しており、調査前は畑となっていた。造成され

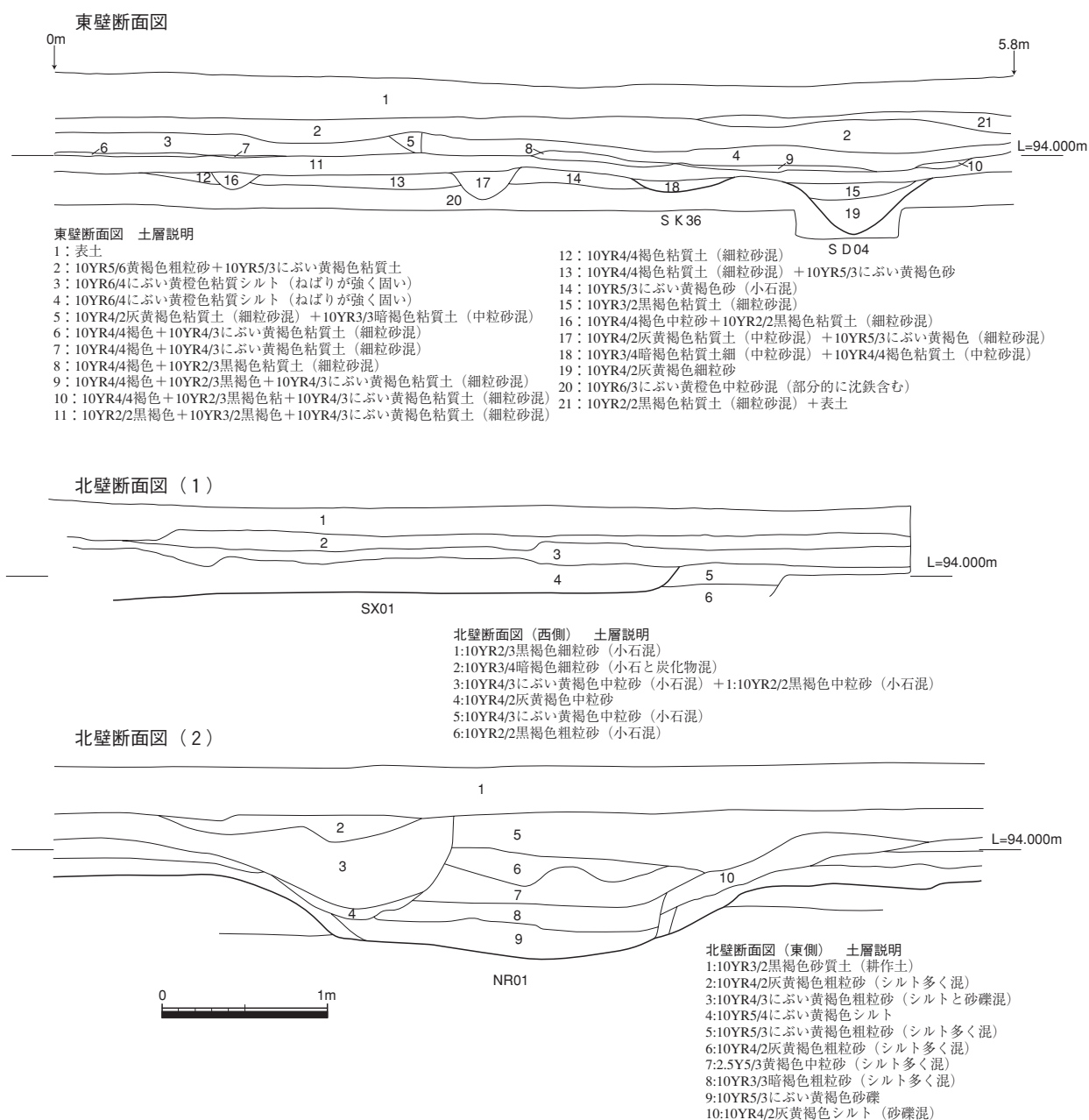


図2 調査区壁面土層図 (1/40)

た盛土層などを約50cm除去すると、にぶい黄橙色中粒砂層（地山）が露出し、この面が遺構面となる。具体的に東壁土層断面図を用いて基本層序を記述する。

東壁では、上位から第1層：暗褐色細粒砂（層厚約20cm）、第2層：黄褐色粗粒砂とにぶい黄褐色粘質土が斑状に混合する土層（層厚約15cm）、第3層：にぶい黄橙色粘質シルト（層厚約10cm）、第4層：黒褐色細粒砂ににぶい黄褐色細粒砂と粘質土が混在する土層（層厚約10cm）、第5層：褐色細粒砂（層厚約5cm）、第6層：にぶい黄橙色中粒砂（層厚20cm以上）の順に堆積する。第1層は畑耕作土、第2層と第3層は盛土層と考えられ、第3層は非常に硬く締っていた。この第3層はおそらく昭和40年代に行われたほ場整備に伴う整地土層と想定される。第4層では古墳時代から江戸時代までの遺物が比較的多く出土する遺物包含層となっている。ただし、江戸時代の遺物が出土することや堆積が斑土状になっていることから比較的新しい（昭和40年代か？）整地層ではないかと思われる。第5層以下が地山となる堆積で、第5層は部分的にしか残存しない。今回検出された遺構は、確認できたものは全て第5層または第5層が残存しない部分では第6層の上面から掘り込まれたものであった。遺構面の標高は94mをわずかに下回る数値となっている。

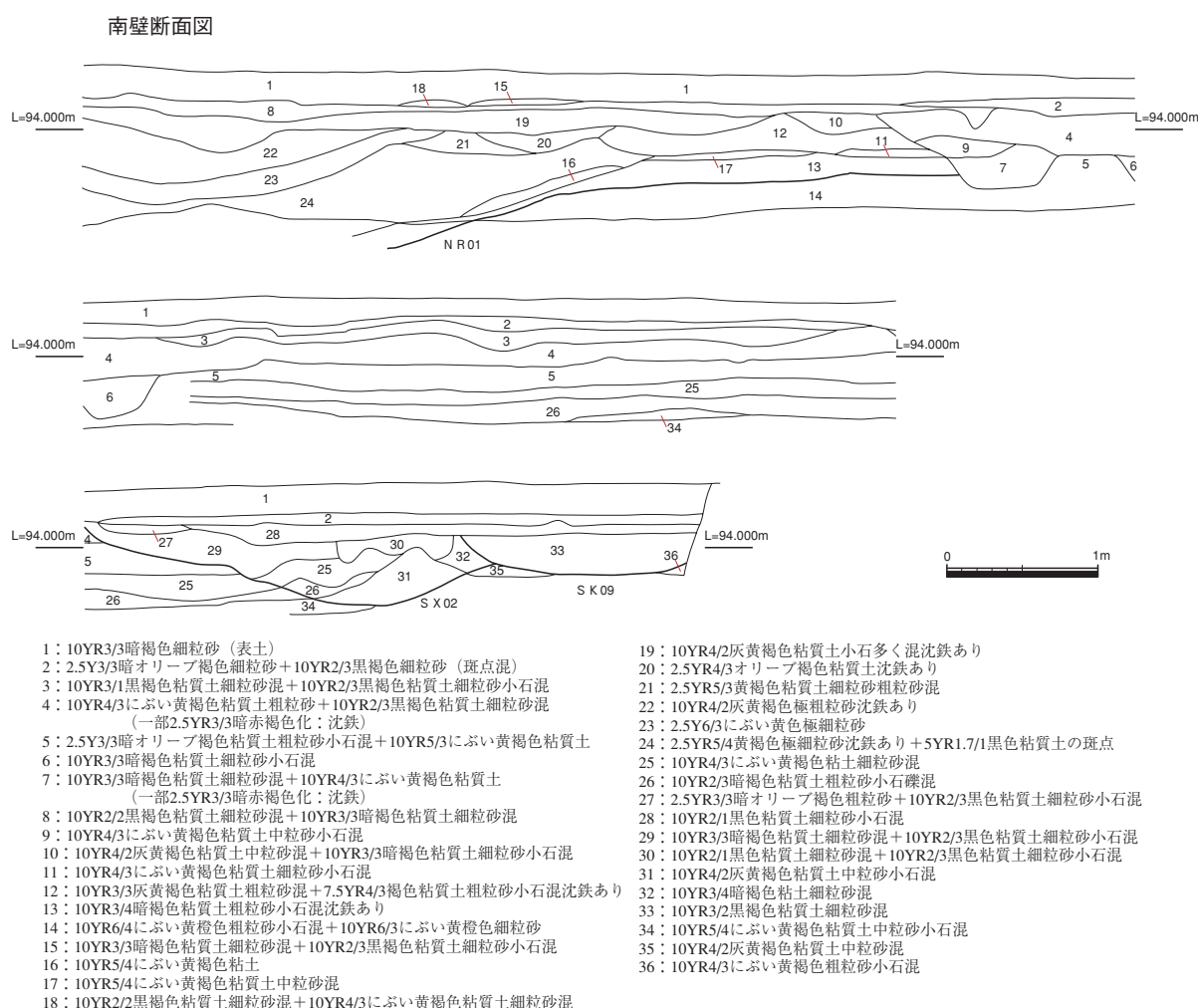


図3 調査区壁面土層図（1/50）

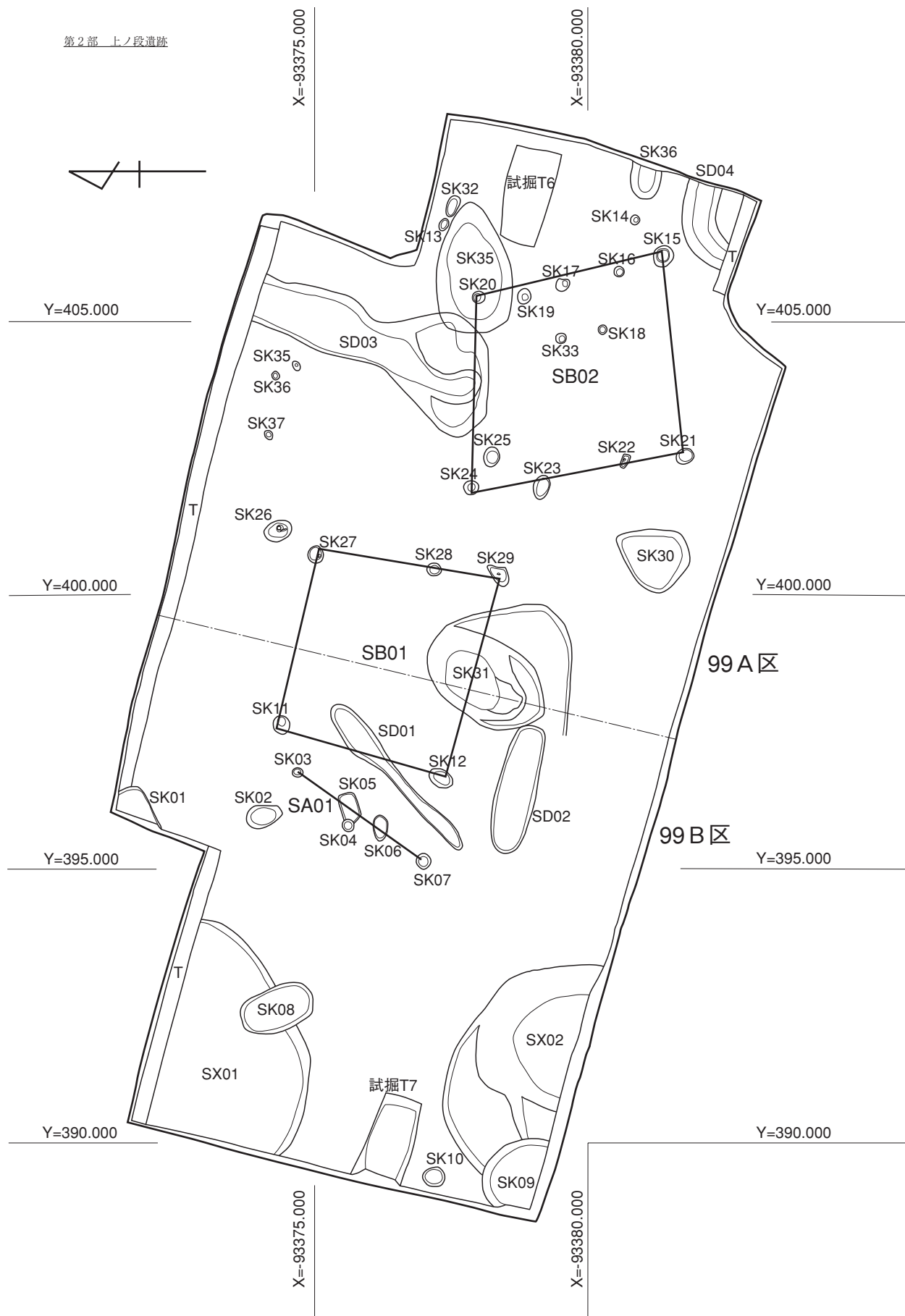


図4 遺構全体図 (1/100)

こうした堆積状況は他面の土層堆積をみると、第5層以下で異なる部分がある。特に、南壁では東半部で流路状に傾斜する粗粒砂や細粒砂の堆積が認められ（NR01）、遺構面が形成される以前に流路が散在し埋積していったものと推定される。

（2）遺構

今回確認された遺構には溝、掘立柱建物、土坑などがあり、これらは基本的ににぶい黄橙色中粒砂層上面で検出されたものである。遺構の検出状況や遺構埋土から出土した遺物が少ないことなどから、多くの遺構で時期を特定しにくい状況である。ここでは遺構の種別に分けて順に報告することとしたい。

掘立柱建物 掘立柱建物は、復元できたもので2棟（SB01・SB02）が確認された。この他にも、柱穴と推測される土坑がいくつか発見されているが、調査区が狭小なため復元できないものなどが存在するものと思われる。

SB01…調査区中央部の99A区と99B区にまたがって検出された桁行2間×梁行1間の掘立柱

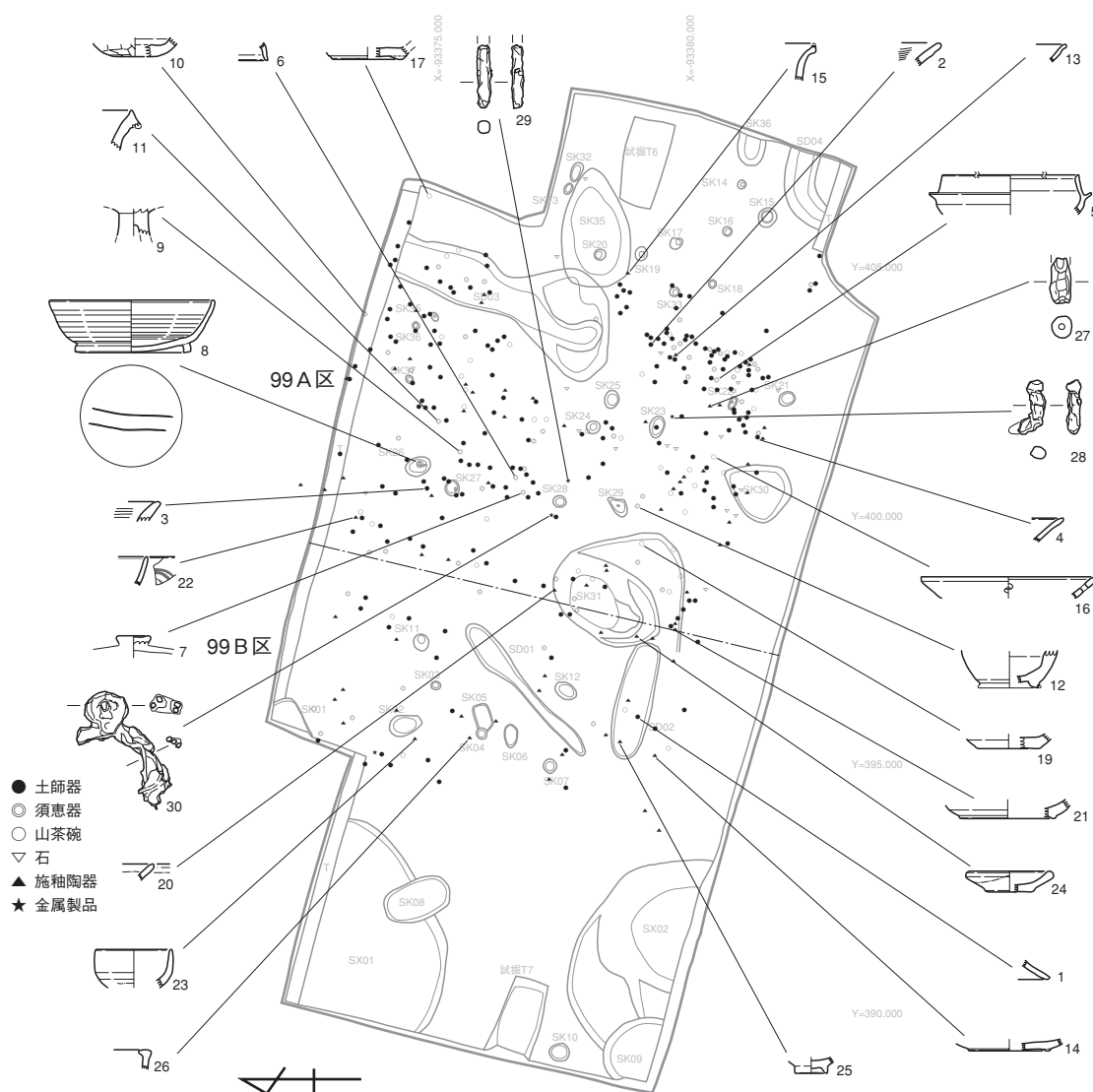


図5 遺物出土分布図

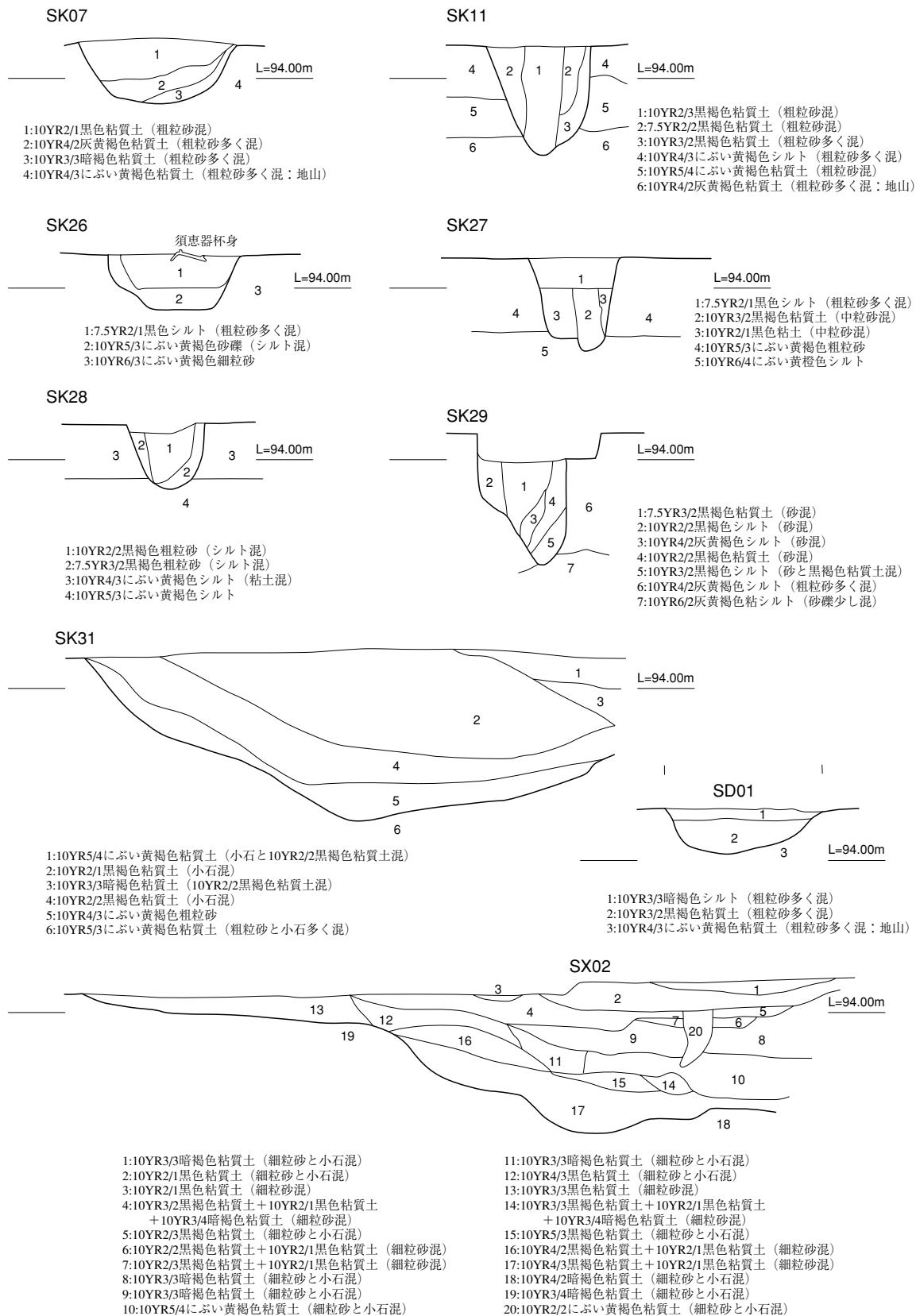


図6 遺構土層断面図（1/20）

建物である。規模は約3.2m×約3.2mを測るが、南西隅の柱穴は検出できなかった。東側柱穴列では柱間は南から約1.0m、約2.2mを測る。柱穴の平面プランはいずれも円形または楕円形であり、柱穴SK27とSK29の土層断面を観察すると柱の存在した痕跡を認めることができた。柱穴SK27とSK29から土師器甕の小片が出土したことから、古墳時代から古代にかけての遺構と推測される。

SB02…調査区東半部の99A区で検出された桁行4間×梁行1間の掘立柱建物である。規模は約3.5m×約2.6mを測るが、東側の柱穴列と西側の柱穴列が適切な位置に対応せず平面プランが平行四辺形になっている点に、この遺構を建物跡と認定するか否かに問題がある遺構である。東側柱穴列では柱間は南から約0.9m、約1.0m、約0.75m、約0.9mとなっており、北東端の柱穴の位置が若干東にずれている。西側の柱穴列では柱間は南から約1.1m、約1.5m、約1.4mとなっている。柱穴の平面プランはいずれも円形または楕円形であり、柱穴の土層断面では特に柱の存在した痕跡を認めることができなかった。柱穴SK22から土師器甕の小片が出土したことから、古墳時代から古代にかけての遺構と推測される。

柵列 柵列は、復元できたもので1条(SA01)が確認された。

SA01…調査区西部の99A区の北寄部分に位置し、3間分が検出された。柱間は南から約1.0m、約0.6m、約1.2mとなっているが、南から3番目の柱穴のみが平面プランが不整形となっており、SA01の一部ではない可能性も考えられる。柱穴から遺物が全く出土しなかったことなどから時期を特定することができなかった。

溝 溝は全部で4条検出された。いずれの溝も遺物が全く出土せず、時期を特定することができなかった。

SD01…調査区西部の99A区北寄で確認された溝である。SA01と対応して南西—北東方向に走り、相互に関連するものと想定される。

SD02…99A区の南部に位置しており、現在の地割りにほぼ平行して走っている。

SD03…調査区東部の99B区の北半で検出された溝で、SD02に直交する方向に走っている。

SD04…99B区南西端に位置するL字に屈曲する溝である。両端とも調査区外に向かって延びている。

土坑 上記で紹介したもの以外の遺構で特筆すべきものをここで報告する。なお、SK26以外は時期を特定できないものばかりである。

SK09…99A区南西端にある土坑で、黒褐色粘質土が充填されていた。

SK11…99A区北部に位置する土坑で、土層断面の観察から柱の存在した痕跡を確認できることから柱穴と思われる。今回はこれに対応する他の柱穴を特定することができなかった。

SK26…99B区北部で検出された土坑で、埋土上位から8世紀前葉の須恵器杯身が口縁部を下に向けた状態で出土した。

SK31…調査区中央部の99A区と99B区にまたがって検出された平面プランが不定形な土坑である。埋土は多くが黒褐色粘質土であり深さは約1.1mを測るが、時期や性格については不明であるが、SX01と類似している。

SK35…99B区中央部で確認された平面プランが不定形な土坑である。遺構検出面をやや下げ

た段階で検出され、遺構か否かについては若干の疑問がある。

SX01…99A区北西部に位置する遺構で、床面が平坦で灰黄褐色中粒砂で充填されていた。整地に関わる遺構の可能性が考えられる。

SX02…99A区南部にある遺構で南半部は調査区外に広がる。深さは約1.0mを測り粘質土や中粒砂などが互層になって堆積していた。SK31とSX02は性格を特定できないが、出土遺物を伴わないこと、掘形が不定形なこと、深さが1m程度であることから、土砂採取跡などの可能性も想定できよう。

第2節 遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は全部で約450点を数えるが、ごく一部の遺物を除き非常に細かな小片となっており、時期や器種を特定することが困難なものが多かった。遺物全体の約99%は第1層から第4層までの遺物包含層から出土したものであることなども考えあわせると、これらは本来の埋没位置から攪乱され整地された中に含まれてしまったものと推定される。遺物は古墳時代から江戸時代までの範囲に属するものであり、これらの遺物が付近で埋没していたものが攪拌されたものとすれば、この付近には古墳時代から江戸時代までの遺構が存在していたと考えることができる。ここではこの中で図化が可能なものを図示し報告する。

古墳時代 古墳時代の遺物には土師器高杯、土師器甕、須恵器杯身、須恵器杯蓋などがある。1は土師器高杯で古墳時代中期と思われる。2と3は土師器甕の口縁部で内面にハケ調整が施されている。4は薄手の土師器口縁部で器種は高杯か。5は須恵器杯身、6は須恵器杯蓋で、共におよそ6世紀中頃に所属すると思われる。

奈良・平安時代 古代に属する遺物には須恵器や灰釉陶器などがある。7は須恵器杯蓋の摘み、8は須恵器杯身、9は須恵器高杯、10と12は須恵器の小形の袋物、11は須恵器甕の口縁部である。このうち8はS K26から出土したもので、底部外面に2本の平行した刻線が残存しており、猿投窯系須恵器の高蔵寺2号窯式期に属するものである。

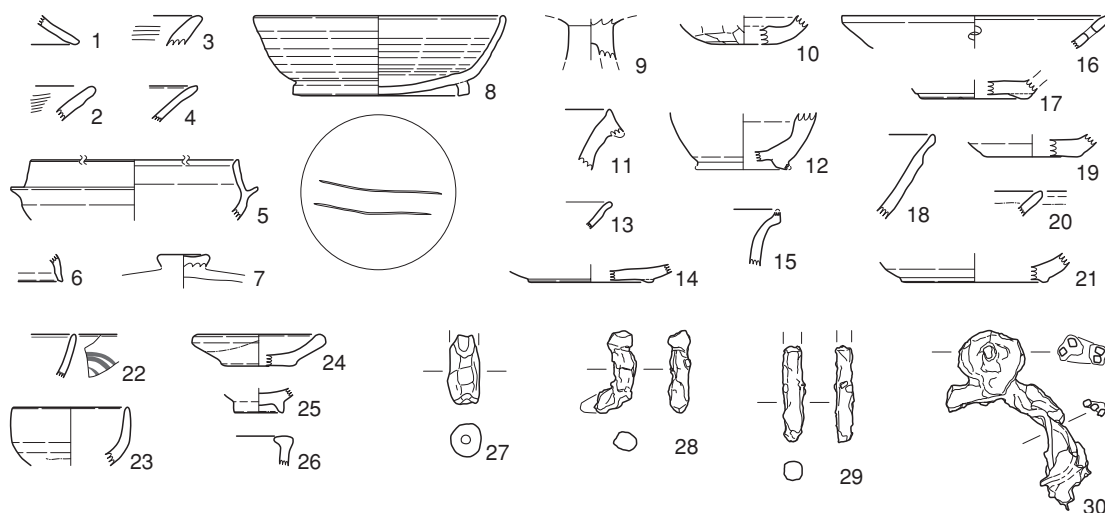


図7 出土遺物実測図（1／4）

13と14は灰釉陶器皿の口縁部と底部、15は灰釉陶器瓶類の口縁部である。

鎌倉・室町時代 中世に位置付けられる遺物には山茶碗類と古瀬戸製品などがある。16は東濃型山茶碗の口縁部で体部が1箇所穿孔されている。17と18は尾張型山茶碗、19は尾張型小皿でおおよそ13世紀後半に属するものである。20は古瀬戸後Ⅲ期の鉄釉緑釉皿である。

江戸時代 21は江戸時代初期の瀬戸美濃窯産志野皿、22は美濃窯産陶器広東茶碗、23は美濃窯産陶器小碗、24は瀬戸窯産陶器灯明皿、25は肥前窯産磁器小杯、26は瀬戸美濃窯産陶器香炉である。大半は江戸時代後期に属する資料である。

時期不明資料 時期を特定し得ない遺物としては、土錘（27）と鉄製品（28～30）などがある。27は土師器土錘で半分が欠損している。28は鉄釘、29は鉄釘の可能性が考えられる棒状の鉄製品、30は針金状の細長い鉄線が捻り編みながらリング状に造型されたものである。30は極めて新しい時期のものかも知れない。

第3章 まとめ

既に述べたように、本遺跡は古墳時代後期の上ノ段古墳に近接し、子持勾玉が採集されている。また、小栗鉄次郎氏によって付近の字架場（はさば）で須恵器広口壺が採集されているという。このことから上ノ段古墳以外の小古墳の存在も推定されている（豊田市郷土資料館1974）。以上のことから、この一帯に古墳時代を中心とする遺跡が広がっていることが調査以前に予想されていた。しかし今回の調査地点では、土層の攪乱によって遺構の残存状況が良好ではなく、特に上ノ段古墳と併行する時期の遺構・遺物について、多くの成果が挙げられなかった点が惜しまれる。

しかしながら、掘立柱建物や土坑などの遺構が確認され、遺物も約450点が出土した。大半の遺構は時期を特定できないが、掘立柱建物については古墳時代から古代（おそらく奈良時代）と推定される。一方、表土出土資料を除く遺物448点の内訳は、土師器（古墳～戦国時代を含む）269点、須恵器55点、灰釉陶器11点、山茶碗類40点、古瀬戸製品2点、瀬戸美濃大窯製品3点、近世陶磁器59点、瓦1点、近代磁器2点、鉄製品3点、土錘1点、不明2点となり、多彩である。これらは調査区全体に散乱しており、今回の調査区は昭和40年代のは場整備に伴う整地でかなり削平・攪乱されたものと思われる。ただし、残存する遺構からみて、古墳時代から古代の集落遺跡が存在し、江戸時代に至るまでの各時期の遺跡が重複または近在したことが推定できた点は、重要な成果といえるだろう。

若干の遺物から本遺跡の時期幅を想定するならば、古墳時代中期から奈良・平安時代にかけて1つのピークがあり、その後、鎌倉時代以降も人々の営みがあったことが想定できよう。後者については高橋荘に関わるものとも考えることもできる。一方前者については古墳時代における簗川上流域の開発が中期を創始としている可能性を示唆しているといえよう。この点については、今後さらに検討を深める必要がある。また、古墳時代後期の古墳築造から奈良時代初頭の舞木廃寺の創建までの簗川流域の活発な営為と、本遺跡がどのような関わりがあったのか、猿投神社の位置付けも含めて今後の課題としておきたい。

引用参考文献

- 愛知県企画部土地利用調整課編 1983 『愛知県土地分類基本調査 岐阜・美濃加茂・瀬戸』
- 愛知県教育委員会編 1977 『重要遺跡指定促進調査報告Ⅱ』
- 愛知県教育委員会編 1995 『愛知県遺跡分布地図（Ⅱ）知多・西三河地区』
- 愛知大学日本史専攻会考古学部会編 1988 『西三河の横穴式石室 資料編』
- 尾野善裕 1993 「猿投窯6世紀の空白をめぐって」『考古学フォーラム』3
- 小幡早苗・近藤美紀 2001 「横穴式石室用語の定義」『第8回東海考古学フォーラム 東海の後期古墳を考える』
- 梶山 勝 1993 「舞木廃寺跡の出土遺物をめぐって ―小栗鉄次郎氏の調査資料を中心として―」『名古屋市博物館研究紀要』16
- 加納俊介 1988 「石室の形状」愛知大学日本史研究会編『西三河の横穴式石室』
- 経済企画庁総合開発局国土調査課編 1972 『土地分類基本調査 豊田』
- 斉藤孝正他1995 『須恵器集成図録 第三巻 東日本』 雄山閣
- 三田敦司 2000 「群集墳論の整理と西三河の群集墳における群構成の諸例」三河古墳研究会編『群集墳の築造モデル』
- 城ヶ谷和広他 1991 「寺野遺跡の出土遺物について」『考古学フォーラム』2
- 猿投町誌編集委員会 1968 『猿投町誌』
- 豊田市郷土資料館編 1974 『豊田市埋蔵文化財調査集報 第1集 古墳Ⅰ』
- 豊田市郷土資料館編 1977 『豊田市埋蔵文化財調査集報 第3集 古墳Ⅱ』
- 豊田市郷土資料館編 1978 『豊田市埋蔵文化財調査集報 第5集 古墳・中世墓』
- 豊田市郷土史研究会編 1976 『豊田市郷土資料館報告九 塚越遺跡調査概報』
- 豊田市郷土資料館編 1978 『豊田市埋蔵文化財調査集報 第6集 寺院跡』
- 豊田市史編さん専門委員会編 1976 『豊田市史 1巻』
- 土生田純之 1988 「西三河の横穴式石室」『古文化談叢』第20集（上）九州古文化研究会
- 森 泰通 1990 「上ノ段遺跡採集の子持勾玉について」『三河考古』3 三河考古刊行会
- 森 泰通 1997 「移動式カマドについての覚書」『三河考古』10 三河考古刊行会
- 森 泰通 1999 「西三河の終末期古墳小考 ―豊田市檜尾古墳群調査報告をもとに―」『三河考古』12 三河考古刊行会
- 森 泰通 2001 「第2章 不動1・2号墳 4.小結」
豊田市郷土資料館編『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集
不動1・2号墳 山ノ神古墳 神明社古墳』

写真図版



上：遠景（南東から） 下：第1層（表土）除去時全景（南東から）



石室確認状況
(南西から)



石室開口部崩落状況
(南西から)



盗掘坑確認状況
(南東から)



石室上半部検出状況
(南西から)



石室上半部検出状況
(北西から)



周溝（トレンチ掘削前）
(南東から)



周溝セクション
(南西から)



石室左壁崩落状況
(東から)



天井石落下状況
(南西から)



上：中央セクション西半部（南西から） 下：中央セクション西半部（墳丘内列石検出時 南西から）



上：中央セクション西半部（完掘時 南西から） 下：中央セクション東半部（南西から）



石室東脇セクション
(東から)



石室縦断セクション (石室後背部)
(南東から)



前庭部土層セクション
(南から)



上：石室・盗掘坑完掘時全景（南東から） 下：石室完掘状況（南西から）



上：石室左壁（南西から） 下：石室奥壁（南西から）



上：石室右壁（南西から） 下：石室右壁（北東から）



上：石室奥壁裏込め（北東から） 下：梱石（東から）



上：石室内遺物出土状況（北東から） 下：石室内遺物出土状況（南から）



石室内遺物出土状況
(南から)



石室内遺物出土状況
(東から)



石室内人骨出土状況
(南から)



上：基底石（南西から） 下：墓坑完掘状況（北西から）



SK01土層断面
(南東から)



(仮称) 寄元5号墳全景
(南から)



(仮称) 寄元5号墳北方セクション
(南西から)



上：遠景（北から） 下：遠景（南西から）



上：石室検出状況（南西から） 下：石室検出状況（南東から）



上：石室全景（北から） 下：石室全景（南から）



上：石室奥壁（南から） 下：石室左壁全体（南西から）



上：石室左壁（南西から） 下：石室左壁開口部付近（南西から）



上：石室右壁全体（南東から） 下：石室右壁奥隅部（南東から）



上：石室右壁開口部付近（南東から） 下：石室閉塞石とみれらる礫（北東から）



上：前庭部（東から） 下：前庭部（東から）



左・右：
石室内土層断面
(東から)



左：
石室内土層断面
(南東から)
右：
奥壁側墓坑土層断面
(南から)



左：
右壁側墓坑土層断面
(南から)
右：
左壁側墓坑土層断面
(南東から)



左：
右壁裏込め
(南から)
右：
石室右壁上部
(南東から)



左：
左壁裏側
(南東から)
右：
天井石
(北から)



上：石室基底石全体（南西から） 下：墓坑全体（北から）



上：墓坑全体（南西から） 下：石室内須恵器出土状況（南東から）



上：寄元2号墳石室（南から） 下：寄元2号墳全景（北西から）



上：99B区全景（西から） 下：99A区全景（西から）



遺跡遠景
(背後の山が猿投山)
(南から)



99A区全景
(北東から)



左：
調査区南壁
土層断面
(北から)
右：
調査区東壁
土層断面
(西から)



左：
SK26
遺物出土状況
右：
SK11
土層断面



左：
SD01土層断面
右：
SK07土層断面



左：
SK22
遺物出土状況
右：
SK28
土層断面



左：
SK31土層断面
右：
SK35全景



左：
SX02土層断面
右：
SD04



左：
図13-1
右：
図13-2



左：
図13-3
右：
図13-6



左：
図13-9
右：
図13-10

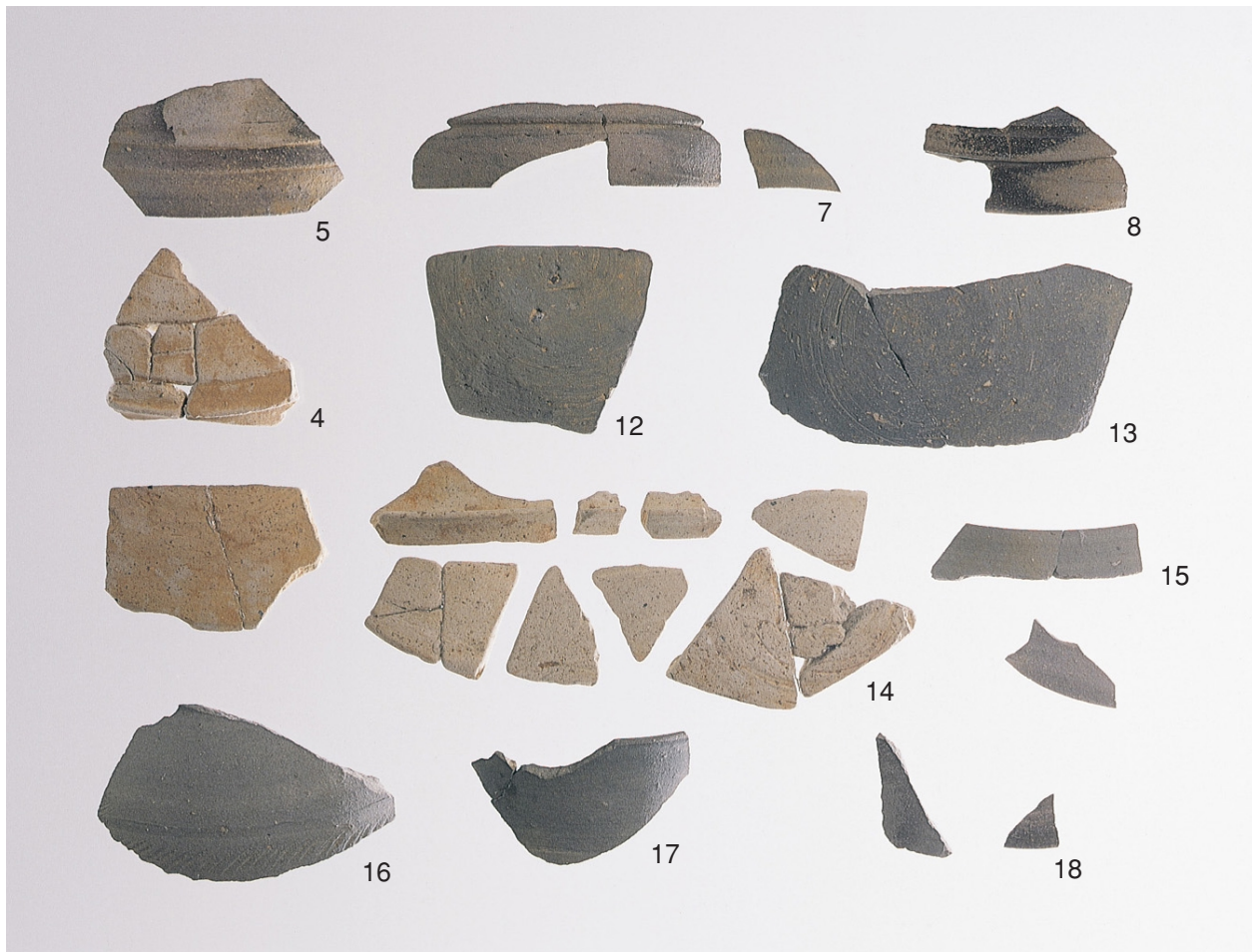


左：
図13-11
右：
図13-19
側面



左：
図13-19
胴部偏平面側
右：
図13-19
胴部膨張面側





上：前庭部・石室内出土須恵器 下：石室内出土金属製品



上：勾玉 中左：耳環 1 中右：耳環 2 下：古墳時代以外の遺物



上左：直刀木質残存部拡大 上右：須恵器提瓶胴部刻書 中左：4号墳出土須恵器平瓶
中右：上ノ段遺跡SK26出土須恵器杯 下：上ノ段遺跡出土遺物

ふりがな	よりもとこふんぐん・うえのだんいせき
書 名	寄元古墳群・上ノ段遺跡
副書名	
巻 次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第104集
編集者名	永井邦仁・鈴木正貴・平尾良光・鈴木浩子
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL0567-67-4161
発行年月日	西暦 2002年 8 月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寄元 3 号墳	愛知県豊田市 加納町寄元	23211	63-484	35° 9′ 35″	137° 9′ 40″	2000.04～06	600㎡	猿投グリーン ロード拡幅工 事
寄元 4 号墳	愛知県豊田市 加納町寄元	23211	63-485			1999.04～06	150㎡	
上ノ段遺跡	愛知県豊田市 加納町上ノ段	23211	63057	35° 9′ 25″	137° 10′ 20″	1999.06	250㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寄元 3 号墳	古墳	古墳時代 後期	横穴式石室	須恵器、耳環、直刀、 鉄鏃	無袖式石室、純銅製耳環 猿投窯産須恵器提瓶
寄元 4 号墳	古墳	古墳時代 後期	横穴式石室	須恵器	8世紀前葉の終末期古墳 猿投窯産須恵器平瓶
上ノ段遺跡	集落	古墳時代 ～ 江戸時代	掘立柱建物 2 棟、柵列 1 条	土師器、須恵器、土錘、 灰釉陶器、山茶碗類、 瀬戸美濃産陶器、鉄製品	猿投窯産須恵器杯

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第104集

寄元古墳群・上ノ段遺跡

2002年8月31日

編集・発行 財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社ぎょうせい